

---

# 少年は幻想の夢を見るか？

門間まどか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少年は幻想の夢を見るか？

### 【Nコード】

N5079Z

### 【作者名】

門間まどか

### 【あらすじ】

剣と魔法、多種多様な種族が生きる世界。フェミュルシア

フェミュルシアに呼び出された二人の少年。

二人の少年のそれぞれの想いは、望むと望まざるとに関わらず、幻想の世界に变革をもたらして行く。

心優しき少年・小柳春は、ある日不思議な夢を見た。

不思議な猫に誘われて踏み入れた先はファンタジーの世界。

フェミュルシアで春を待っていたのは、身の丈が小さな建物ほども

ある赤銅の鱗を持つドラゴンだった。

しかし、そのドラゴンとの出会いは偶然ではない。

過去に置き忘れた必然に導かれ、春はドラゴンと契約する。

正義感溢れる少年・天城里桜。彼もまた、ファンタジーの世界に誘われていた。

彼を誘ったのは美しき姫君。

心優しき姫君の身に危機が迫ったとき、里桜は救いを求める声を聞いた。

姫君に手を差し伸べた里桜は否応無しに、フェミュルシアの国に、世界に、飲み込まれてゆく。

## 赤髪の幻影（前書き）

このファンタジーは基本的に二章構成です。

一章と、それに対を成す対の一章。という風に書いていきます。

なので、片方のサイドだけを見たい方は一章飛ばしでご覧になることをお勧め致します。

どちらの章も、章が進むにつれてお互いの章にかかわっていきますので、極力両方を読み進めていただけたらと思います。

## 赤髪の幻影

（序章）

眼を幾度か瞬かせると、滲んでいた景色が少しだけはっきりとする。そこは、まるで大きな樹木の根を屋根にしたような、緑に囲まれた空間だった。

何故自分はここにいるんだろう。

樹木の枝葉の隙間から、昼前なのだろうか、温かく、柔らかい日差しがいたる所に光の筋を作り出し、

日の光を浴びた草花が伸び伸びとその葉を伸ばして見た事もない色取り取りの花々が誇らしげに咲いていた。

何もかもが見慣れない光景で、少しでも自分の知っている景色を探そうと眼を凝らす。

眼を凝らせば凝らすほど、その光景はどこかで見たようでも、初めて見たようでもあるように思えた。

しかも、何かひとつに焦点を合わせて見ようとすると、ずっとそのものがぼやけて、何であるかはわかるのに、その光景を鮮明に見る事ができないのだった。

依然としてピントの合わない緑色の景色の奥、水が流れ落ちる静かな音が聞こえてくる。

近くまで歩いて行くと、大樹の根を伝って落ちてきた水が地面の窪みに流れ落ちてできたような池があった。

ちょうど池の真上に穴が開いているのだろう。

真上からさす光に照らされてキラキラと流れ落ちる水は清らかで、水底が透けて見えていた。

その水に手を伸ばそうとしたとき、

「君は、何に変えても守りたいものがあるかい？」

金色の柔らかな眼を軽く細め、赤色の少し硬そうな髪が揺れて。

何時からそこにいたのだろうか。

ぼんやりと滲んだ景色の中、滲んだ輪郭でもハッキリとわかる程に日本人離れた、背筋が凍るような美貌の未だに幼さが残る少年は、ただ、当たり前前のように、水の上に立っていた。

「守りたい……モノ？」

滲む景色とは真逆に、鮮明に聞こえるハイトーンソプラノの歌うような綺麗な声に問い返す。

すると、また同じ、まるでオペラでも聴いているような綺麗な歌声にも似た、少年の声。

「守るといふのは、守らなかったもう片方を、傷つける事。君は、それを良しとできる人かい？」

問いかけにどう答えるべきか。少しの間水面に揺れる葉を見ながら考えた結果、少年の方を向いて答える。

「僕は、守るって事が、傷つけるってことだつて知ってても、それでもやっぱり、守れるモノは、守れるだけ守りたいと思うよ」

少年の表情は、滲んでいてわからない。でも、その澄んだ金の瞳は、ずっとこちらを見透かすように、上から注ぐ光に負けない程の輝きを向けていた。

暫しの沈黙。さあつと風が駆け抜ける感覚と、水面がそれに伴って揺れるのがわかるようだった。

風に弄ばれる髪を軽く押さえるようにしながら、少年が口を開く。

「そうか。僕は君のお陰で決心がついた。君にあえて良かったよ。

また、近いうちに」

儚げだで、少しだけ悲しそうな表情の少年はそういつて、こちらに手を振っていた。

## 赤髪の幻影（後書き）

序章です。

文字制限に引っかけた為、元々一章と同時に掲載する予定を急遽序章のみの掲載という形に落ち着かせました。続きは次の第一章になります。

く 始まりの声く (前書き)

序章に引き続き、ようやく一章となります。



〈始まりの声〉

第一章・始まりの声

ピピピ、ピピピ、ピピ……

「ん、もう……朝？」

ふわふわの茶髪を無造作に掻きながら、カーテン越しに差す朝日に目を細め、小柳春はもぞもぞと布団から這い出ながら目覚ましのタイマーを止める。

「ふわあ……う。何だったんだろう……何か、変な夢を見た気が

」

チリン。

不意に鈴の音が聞こえて、春は音のした方に視線を向ける。

「おはよう。お寝坊さん？」

猫がいた。

「……うわあっ!？」

さも当然のように窓際に座り、あまつさえ春が起きるのを待ちわびたとしても言う様に毛繕い等しながら、猫がそこにいた。

余りの唐突さと現実味のなさに驚き、春は盛大にベッドから転げ落ちてしまう。

「それはこの世界の人間の習性なのかな？」

猫はそんな事を言いながら、斑色の尻尾を左右に振り、チリンと鈴を鳴らしながら窓縁から飛び降りて春の目の前まで緩やかに歩いてくる。

「それとも、こっちで流行っている健康法か儀式か何かなのかな？」

「え、えつと……君は何?どうやって入って……っていか何でしやべつて ええつ!？」

歩く世界珍百景が目の前に現れた所為で、春の言葉は意味を成さない。

「やれやれ。冗談はさておき、学校とやらはいいのかな？」

時計が読めるのか、目覚まし時計のほうに目を向けながら、猫はそんな事を言う。

「え？　ああっ！！良くない、良くない！！全然良くないよ！！早くしたくないとっ」

釣られて時計を見た春は時刻を確認して仰天し、猫の事はとりあえず二の次という感じに着替え始めた。

「春ー？何騒いでるの。早くしないと遅刻するでしょー？」

階下から母親らしき声がして、それに答えるように春も声を張る。

「お母さん、ご飯良いからお弁当出しておいてー！！！」

「全く、朝から騒々しいんだから。早く仕度しなさいねー？」

階下では弟が騒いでいるのか、弟と母親の声が入り混じって朝の忙しさを助長させていた。

そんな喧騒に急かされて、数分で支度を終えた春は家を飛び出した。家を出る前に

『焼いちちゃったものは仕方ないんだから食べながら行きなさい』

と半ば無理やり銜えさせられたトーストをかじりながら、春は通いなれた通学路をやや小走り目に歩く。

その横の塀を先ほどの猫が併走するように付いて来る。

「忙しいねえ。もう少し早めに起こした方がよかったかい？」

塀の上を器用に歩く猫が、トーストの最後の端切れを口に押し込んでいる春の姿を面白げに見下ろしながらそんな事を言った。

「んぐ……そういえば、君は……？」

春は欠片を飲み込み、改めて猫を眺める。

頭の前から順々に観察するが、見れば見るほどおかしな猫だった。

猫としてみるなら整った顔立ち、額に茶色の毛が縦模様に入っており、金の瞳は緩やかに細められ春を見返してくる。

赤い首輪に金の鈴、白い毛に茶色やオレンジ色の毛が混ざった三毛猫の様だが、どこか違和感がある。

漠然とした違和感の正体を突き止められずにいると、猫が再び口を

開く。

「ああ、そうそう。自己紹介がまだだったね？」

「そういう問題でもないと思うけど……」

答えながら、春は注意深く猫を観察していると、ちようど、塀の敷地内から伸びた小枝が猫の進路をふさいでいるのに気づいた。

猫はそのまま飛び越える物と春は思っていたのだが、実際には猫は避ける事すらせず、文字通り素通りしたのだった。

「まあまあ、私の名前は……そうだね、この世界ではチエシヤ猫、と言ったら通りが良いのかな？……まあ、異世界からの来訪者だよ」  
すり抜けた際、猫 もとい、チエシヤ猫の体が薄く揺らぐ。

そんな状況にも驚くが、チエシヤ猫の言葉にも同等のインパクトがこめられていた為に、春は何とか言葉を返すことができた。

「異世界って……また突飛な」

「そうは言うけれど、こちらの世界で私と似た外見を持つ種は喋らないと言つのが通説らしいし、この状況がすでに突飛だと思っただけど、どうかな？」

やっとの事で返した春に、間髪いれずにチエシヤ猫は小さく笑った。笑われて恥ずかしい事などないのにも拘らず、春はどこか気恥ずかしくて軽く頬を赤らめながら、チエシヤ猫から視線をはずして問いかける。

「それは僕の台詞だよ。そもそも、君……チエシヤ猫さん、チエシヤ猫さんがどうして喋ってるのかわからないし、そもそも異世界なんて急に言われたって……」

「急に、ね。そうそう、私のことはチエシヤでいいよ、改まって言われてもどうしたらいい分からないからね。それよりも、まだ君の名前を聞いていなかったね？」

そんな春に、可愛らしい物を見るような調子でチエシヤが切り返す。春は今更気づいた様で、慌ててチエシヤ猫に顔を向けながら

「……あ、す、すみません。僕は小柳春って言います」  
などと自己紹介するのだった。

春の、ある種の初々しさに内心苦笑しつつ

「ハル君か、いい名前だね。……所で、急にと言っていたけれど、君は我が主には会っただろっ？」

チエシヤ猫はチリンと鈴を鳴らして首をかしげた。

「……我が、主……？えっと、誰の事だろっ……」

春は首を傾げながら心当たりを探そうと視線を彷徨わせるが、コンクリートの間からひっそりと顔を出す花が視界に映る以外、それらしい事は浮かばなかった。

そんな春を横目にみつつ、チエシヤ猫は小さく飛び、塀からガードレールへと、器用に綱渡りを続けながら足場を代えて

「君は会ったはずだよ、深緑の森で、我が主と」と、目を細めて言った。

春は考え込む様に足を止め……というより、信号待ちで止まったまま、ぼんやりと夢の景色を思い出した。

「……チエシヤさんの言う、主って言うのは、赤い髪の男子？」  
春の言葉に、ピクリとチエシヤ猫の耳が揺れる。

「あら、あらあら。我が主はそっちで君に会ったのか。我が主ながら、つくづく御人好しだねえ」

「ああ、やっぱりあの子がチエシヤさんの主さんだったんだ」

「そうさね。君が会ったその方こそ、我が主だ。君は我が主に会うために、一度私たちの世界へきているじゃないか。なのに何故突飛と言っただい？」

今度は本当に興味がわいたという風に、尻尾を振ってチエシヤ猫が尋ねる。

赤だった信号が青に変わり、春は横断歩道を渡りながら、やはり考えるように言った。

「あの世界が……異世界……てつきり夢だと思っていたのに。やっぱり、別の世界があるんですね」

「やっぱりって事は、存在を知っていたのかい？」

「いいえ、でも。あつたら良いなって。思っていました」

春は晴れ渡った青空を仰ぐ。そこには雲一つない快晴の空が広がり、小鳥たちが数羽、じゃれ合う様に飛び回っていた。

「どうしてそう思うのかな？」

釣られる様に空を見上げ、小鳥たちの飛ぶほうへ視線を向けながら、チエシヤ猫は問いかける。

春が無言で歩を進め、考えている間の僅かな沈黙。まるで何でもない朝の登校風景。

そんな風景の中で、春はぽつぽつと答えはじめた。

「……この世界を見ているのは人間で、僕も人間だから、僕が知ってるのは僕が見ている人間の世界。だけど、他の人がいる分だけ、その人が見る世界がある」

「そうかもね」

「だったら、その他の世界だって、あってもいいんじゃないかなあつて、そう思っただんです」

チエシヤ猫に軽く微笑みかけて、前を行きかう人に漠然と視界を移しつつ足を緩める。

春の出した答えに、チエシヤ猫はしばらく考える風に黙ったまま、とことこと春の後をついて歩く。

暫く歩き、学校が近くなるにつれて、春と同じ制服を着た学生が増えてくる。

行きかう人たちはチエシヤ猫には目もくれず、まるでそこに存在していないかの如く、春のすぐ横を通り過ぎてゆく。

しばし無言で歩いていたが

「君は、もし、誰かを助けられるとしたら、助けたいと思う？」

チエシヤ猫は先ほどと同じようにチリンと鈴を鳴らしながら首をかして春を見上げる。

「……僕の手の届く限りは、助けたいと思うよ」

小さくつぶやくように、春もチエシヤ猫に目を向けながら笑いかけると

「それは君の世界の中で？」

チエシヤ猫は切り返すように質問を重ねた。

その頃には既に校門が間近に迫っており、春と同じ制服に身を包んだ学生たちが何人も見える。

「もちろん、僕の手の届くところは、僕の知っているとこだから。逆に、知らなくて手の届く場所なんてあるの？」

学校に到着した春はいつも通りに下駄箱へ向かい、なれた調子で靴を履き替えながら小声で問いかける。

「……あると言ったら？」

ちょうど目線があう高さになっていた春に、チエシヤ猫は覗き込むように、まるで試すような口調で問いかけた。

靴を履き替え、つま先を地面に軽く慣らすようにとんとんと蹴りながら

「それは、チエシヤさんの世界？」

脇に置いた鞆を持ちながら、ふつと静かな口調でそういった。

春が階段を昇りながらチエシヤ猫の方をちらりと見ると、チエシヤ猫も遅れずにぴよんぴよんと器用に跳ねながら昇ってきて

「どうしてそう思ったのかな？」

と、手摺を経由して階段の上まで一気に上り、逆に見下ろすような形でチエシヤ猫が問いかけた。

「チエシヤさんの主さん？……が、酷く、悲しそうな顔をしていたから」

そんなチエシヤに追いついて、春は小さく呟く様に答え、階段を上りきって、教室に入って行く。

春を追いかけるチエシヤ猫が教室の前で止まり、

「もし、私が助けてほしいって言ったら、君は助けてくれるかな？」  
問いかけた声に振り向いた春の視界には、チエシヤ猫の姿は、もうなかった。

チエシヤ猫の姿を探して視界を巡らせていると、始業を告げるチャイムの音がスピーカーから流れてきた。

渋々席につきながら、春は少しの間考えるように目を閉じ、既にい

ないチエシヤ猫に答えるように

「……僕は」

春の呟きが、教室の喧騒に飲まれて消えた。

学校にいる間の時間が、まるで朝の出来事が夢の続きなのではないかと思うほどに穏やかに流れる。

ぼんやりと窓の外に見える校庭の木々を眺めながら、その風景を夢で見た風景と重ね合わせて、春は小さくため息をついた。

「綺麗だったな……」

思わず、口について言葉が漏れる。

あの綺麗な景色を、今寝たらまた見られるだろうか。そう思わずにはいられないほどに、春はもう一度あの景色を、今度は渗むことなく、見たいと思っていた。

いつまでも夢のことを考えても仕方ないと、春は半ば無理やりに思考に区切りをつけて視線を教室の中へ戻す。

すると、いつからそこにいたのだろう。目の前に見知った顔がにやにやとあごを擦りながら立っているのに気がついた。

「どうしたー？春、恋か？」

からかう様な、それでいて本気で聞いているような調子で、染めたのだろう、根元に軽く元の黒が覗く茶髪を無造作に掻き揚げた様な髪型の男子生徒が言う。

「そんなんじゃないよ。ちょっと、夢を見てさ」

そんなに浮ついて見えただろうか、ちょっと気恥ずかしげに笑いながら、春が答えながら軽く身を引く。

「相変わらずお前は夢だの人だのって、哲学的というか幻想的というか……」

そんな春に、多少は期待していたのだろう、軽い落胆を隠しもせず春の前の席の椅子を拝借して、男子生徒は春と向かい合うように

座りながら苦笑した。

「いいじゃない。人に夢見るのも、夢に幻想を抱くのも自由だと思わない？」

机に頬杖をつきながら柔らかな物腰で答える春。

「まあね。……とまあ、そんな話をしていても腹は膨れないわけだが」

男子生徒は軽く頭を縦に振るだけにとどめ、春に顔を近づけるようにぐいっと身を乗り出して至極真面目な顔で言うのだった。

そんな男子生徒からやや身を引きつつ、春は逡巡の後に問い返す。

「……何が言いたいのかな？」

男子生徒は何かを葛藤するかの様に表情をころころと変えながら迷った末、バンと机をたたき勢いで立ち上がりながら

「春君のお母さんの手料理をください！」

と、教室に響き渡らん勢いで春に迫った。

一瞬、教室が静まり返る。そんな沈黙を春は気にした風もなく、むしろ、いつも通りの調子で軽くため息をついて返す。

「普通に昼飯忘れたから分けてくれて言ってよ」

首まで真つ赤に赤面しながらオーバーアクション気味に親指を立てて春に示しながら

「ナイス意識」

と、席に座り、まだかまだかと今度はご飯に意識が行ったようで、春の鞆をしきりに気にしながらそわそわし始める。

「……はあ。まあ、いいけど。それで、今日はまたなんで忘れたの？」

鞆からお弁当を出すために春は軽く身をよじり、机の脇に置いてある鞆の中をあさり始めるころには、教室は既にいつも通りの喧騒に包まれていた。

遠くから、また納雨いしづめかあ。などといった笑い声すら聞こえてくる。

そんな喧騒に多少なり赤みの抜けた、しかしまだ恥じ入っている様子の男子生徒が歯切れ悪く答える。



「いやあ、妹が作ってくれてたんだけど、朝……ちよつとな」

「また喧嘩？理由は聞かないけれど、また丙ひのえが何かしたんじゃないの？」

お弁当箱を包みから取り出しながら呆れる様に言う春に、男子生徒、納雨丙いりさめひのえはぶんぶんと首を振って

「違う、あれは絶対末明ほのかが悪かったんだ！」

「まあ、双方の話聞いた訳でもないから、どうともいえないけど……でも、この間もご飯分けたよね？」

「悪い悪い。前回だってちゃんと御礼はしただろ？」

「末明ちゃんがね。……ああ、クッキーおいしかったって、伝えておいてくれるかな？」

言い訳に対して思わぬ形で切り返され、丙は言葉に詰まったように口をつぐむ。

「……」

意地を張っているのが手に取るようにわかるような丙の真っ直ぐな態度に、春は若干の苦笑交じりに

「仲直り、するんでしょ？」

飲み物の紙パックにストローを挿しながら問いかける。

見透かされたような気がして、丙は頭を掻きながら春に向き直り、歯切れ悪くつぶやいた。

「なんか……悪いな、氣い使わせちまったみたいで……」

「その分だと、多少なり自分にも非があったと思ってるんだから、ちゃんと話し合って仲直りしなよ」

「そうする」

丙の返事を聞いて納得した春は、軽く手を叩いてこの話は終わりというように箸に持ち替え

「ん。じゃあ、まあ。いただきますーす」

とお弁当の中身をつつき始める。

それに習って丙も貰ってきた割り箸を割り、春のお弁当を分けてもらう。

「いただきまーす。やっぱり春のお母さんの卵焼きうめえ！」  
「どうして人の家庭の味を覚えてるんだか……」

卵焼きひとつで大はしゃぎする同級生を微笑ましく想いながら、春はふと視線を校庭の自然に向ける。

ザ、ザザ……

視界に一瞬ノイズが奔り、景色が錯綜する。

窓ガラスが消えて、校庭がなくなる。

代わりに、巨大な樹木の枝葉が生い茂る、夢で見たのと似た景色が広がっていた。

赤髪の少年が、樹木の前の開けた場所にぼつんと立っていた。そして、その隣には、朝話していた、チエシヤ猫らしき姿もある。

少年が呟く様に口を動かしているのが見える。

春は、少年が何を言っているのかを理解しようと、注意深く視線を向けると

「た、す。けて……？」

何故か、春は少年がそう言っている様に思えた。

「君の事、僕は……助けることができるの……？」

春が、届かないとわかっていて、呟く。

すると少年は薄く笑って、確かに、肯いた。

ザザ、ザ、ザザザ……

視界のノイズが一段とひどくなり、春はしきりに目を擦る。

すると、視界には既に元の校庭と窓ガラスがはまっており、巨大な樹木も、少年も、猫の姿すら、どこにも存在していなかった。

視界が元に戻ると、聞き慣れた丙の声が段々と強くなる。

「おい。春ー？はるー、このタコさんウィンナー、貰ってもいいかって聴いてるんだけどー」

「……うえっ！？あ、う、うん」

突然、靄がかかっていたような思考が晴れて、春は咄嗟に肯いてしまふ。

返答を聞くや否や、丙は早業とも呼べるような速度で割り箸を使い、

気づけば最後の一個となっていたウィンナーをつかみ上げ、そのまま口に放り込んでいた。

「よっしゃ！春のお母さん手作りタコさんウィンナーゲット！やっぱりうめえ！」

満足げに咀嚼している丙をみて、ハツとなり弁当箱を見る。

すると、既に丙が粗方食べつくした後で、春は自分がほとんど手をつけていない事に思い至った。

「……あ。僕のお弁当……」

呆けた様な春の言葉に、丙は膨れたお腹を軽くさすりながら拝むような仕種をして

「だって春、ずっと呼びかけてるのに上の空だったし、いらないのかと思って。あのまま残してて休み時間終わっても勿体無いじゃん？」

などと謝るのだった。

夢の中にいたような浮遊感と、もう戻ってこないお弁当という物量に、春は諦めきった調子で

「……ああ、うん。もういいよ……うん、もう……」

と嘯くのだった。それと同時に、休み時間の終了を告げるチャイムが鳴り、丙が慌てて自分の席に戻ってゆくの尻目に、春もお弁当箱を仕舞い始めた。

帰りのホームルームを終えて先生が教室を出てゆくと、クラスが急に騒がしくなる。

「くあ……ああ、やっと終わった」

軽く背筋を伸ばし、傾きかけた日差しに目を細めて春は何気なしに庭園を見た。

橙色の光に照らされ、微かな風に揺れる枝葉に伴って、影が地面を這う。

そんな影の中に、見かけた姿を発見した。

「おーい。春。帰ろうぜー」

丙が春に声をかけるが、春はまったく気づかない様子で校庭の一点を見続けていた。

不意に、その姿が踵を返すのが見える。

「……チエシャさん」

咄嗟に席を立ち上がり、鞆を持って教室を駆け出す。

「お、おい。春ー!!」

後ろから呼びかける丙の声が聞こえたが、今の春の耳には届かなかった。

今の春の頭には、ただ漠然と、答えられなかった問いを、きちんと伝えなければならぬという、それだけの思いが渦巻いていた。

部活へ向かう人や帰宅でこつた返す廊下を駆け抜ける。

時々ぶつかりかけてはすれ違い様に一声謝りつつ、廊下を駆け抜け、校庭へでる。

先ほどチエシャ猫がいた場所で、春は肩で息をしながらあたりを見回す。

「チエシャさん……居ない。何で」

チエシャ猫の姿を探して首をめぐらせる春の頭上、木々が揺らめいて、春に影を落としていた。

チリ……

風に漂って、微かに鈴の音が聞こえる。

自然、春が其方へ視線を向けると、先ほどからそこに居るのが当たり前というように、チエシャ猫が毛繕いをして春を見ていた。

春の視線に気づくと、ふいっと尾を振って、まるで導くかのように学校の外へ歩いていく。

「チエシャさん……っ!!」

誘われていると気づいていたが、春は迷わずチエシャ猫を追いかけて学校の外へ駆けていった。

「チエシャさん、待って!!」

幻のように消えては、少し先の曲がり角を曲がってゆくチエシヤ猫の後姿を追いかけながら、春はチエシヤ猫に呼びかける。

聞こえているのか聞こえていないのか、チエシヤ猫は時々春がついてきているか確認するかのようにちらりと見てから、まるで弄ぶ様に消えては現れてを繰り返して、春を誘って行く。

小道を曲がり、路地へ入る。徐々に人が少なくなつてゆくのを感じたが、春はどうしても、チエシヤ猫ともう一度話がしたかった。

そして、チエシヤ猫の主だという、あの少年とも。

息を切らせながら追いかけてゆくと、急に開けた場所に出た。

夕焼けが直接顔に当たり、思わず目を細める。

手を日よけに翳しながら光の向こうを見ると、チエシヤ猫らしき陰が座つて此方を見ているのが見て取れた。

「……待つてたよ。ハル君。答えを聞かせてもらえるかな？」

笑うように問いかけるチエシヤに、春は呼吸を整えながら、予め考えていた答えを述べる。

「チエシヤさん……僕は、僕が守れる物ならば、守つてみたい」

答えを聞いたチエシヤは、軽く首をかしげて

「それは、ただの親切心かな？」

まるで値踏みするかのように目を細めて再び問いかける。

改めて問いかけられた言葉に、春は言葉を選ぶようにしながら

「……そう、なるのかな……。たぶんただの大きなお節介。でも、

チエシヤさんの主さん……あの子のかわいそうな顔は、見て居たくないから……それじゃ、ダメ？」

ぽつぽつと付け加えながら、ゆつくりと微笑んだ。

不器用だが、それでいて暖かな春の言葉に、チエシヤ猫はころころと笑い出す。

突然笑い出したチエシヤ猫の態度に、春は困つたように頬を掻くと「いいや、いいや。十分だよ。それで十分重畳だ。ハルは本当に優しいね」

チエシヤ猫は笑いながらそう言いながら、まるで手招くように尾を

振りながら春の元へ歩み寄ってくる。

「それで、僕はどうしたらいい？」

しやがみ込んでチエシヤ猫に目線を合わせるようにしながら問いかける春に

「これを見て」

と行って、チエシヤ猫は奥の地面を尾で示す。

「私がルグラ 此方の世界に来たときに使った魔法陣さ」

夕日を受けて、淡く青色に光る地面に浮かび上がった奇妙な文様。不思議な輝きを放つ文様に手を翳しながら

「……綺麗だね」

春が呟く。指が軽く触れたと思った直後、わっと輝きが増して春の顔を照らす。

「うわっ」

「ハル君のマナに反応したんだ」

驚いて飛び退く春に、チエシヤ猫は文様の輝きにうつすらと目を細め、満足そうな顔をしながら答える。

「マナ……？」

「そうさね……その辺の話もしていなかった……」

「その辺の話……？そういえば、何故チエシヤさんの主さんは、チエシヤさんを……えっと、こっちの世界？に送ったの？」

「今から話す事は、きつとハル君に理解できないことも多いと思うけれど、最後まで聞いてくれたら助かるよ」

「うん、まずは聞いていい？」

春が問い返すとチエシヤ猫は

「私が住んでいる世界は、今危機に瀕してる。そして、私は助けを求めるためにここへきた。といったら、信じてくれるかな？」

と、今までとは違った表情で、真剣そのものといった風に言うのだった。

春はしばしの沈黙の後、小さく口を動かして

「信じるよ」

そう答えた。

それを聞いたチエシヤ猫は微かに安堵するようなくさを見せるが、すぐにそれを打ち消して言葉を続ける。

「……私の住む世界フェミルシアは、有り体に言えば、ハル君達の言うフアンタジー……というのだっけ？そういう世界なの」

フアンタジーの世界といわれ、春が最初に思い浮かんだのは、ロールプレイングゲームの様な世界だった。

もしくは、ライトノベルのような。と言った方がいいのかもしれない。

とにかくそんな、夢と希望溢れるような世界だった。

「フアンタジーにも色々あるけれど、スタンダードな所で、剣と魔法とモンスター。みたいな所？」

春がそんな風に言うと、チエシヤ猫は少し戸惑うような調子で頷いた。

「そんな所かな？……そして今、私達の世界を構成するのに必要不可欠な要素であるマナ……君たちの世界で言う、石炭や石油みたいな資源ともいえる」

資源という言葉を聞いた時、春の脳裏には先ほどの、危機に瀕した世界といったチエシヤ猫の言葉を思い出す。

「石炭、石油ね……それを奪い合っている……って事？」  
言葉を汲むように、チエシヤ猫に問う。

それに答える様に小さく頷きながら

「それもある。けど、そもそもマナの生成を担っている魔光石ジュエルとして石を人間　私の世界で言う、マニトマニトという種族が消費物にしてしまっているから、世界そのもののマナが減ってきているのさ」  
チエシヤ猫は小さくため息をついて空を仰ぎ見る。

「人は……マニトは、資源が減っている事を知らないの？」

チエシヤ猫に倣い、空を見上げると、既に暗くなりかけた空に一番星が煌いていた。

「知っているはずさ。ただ、どうして減っているかが判らないだけ

でね」

チエシヤ猫は尻尾を横一文字に振ってそう答えた。

「なら教えてあげればいいんじゃない？」

「それで話が済んでいれば、態々私がこちらの世界まで足を運ぶ必要もなかったと思わない？」

チエシヤ猫は空を見上げたまま、尻尾を振る。

「……だよね」

空を見たまのチエシヤ猫に視線を戻しながら春が相槌をうつと、チエシヤ猫は立ち上がりながら

「マニトにマナは見えない。だから効率的な抽出運用法として、マナを生成している魔光石に目をつけた……」

とこと魔法陣の円の中へ入ってゆく。

「しかし、その所為でマナが減少していると教えてもマニトは信じず、それどころか、我々魔族がマナを独占しているなどと言い出す始末」

円の中心までくると、春の方へ向き直りながら言葉を続ける。

「マニトが蒔いた種で苦しめられているにも係わらず魔族の所為にされては、元々マニトに快い感情を抱いていない魔族が黙っているはずもない」

「魔族にとつてマナは酸素にも等しい。それを奪われまいとする魔族。エネルギーと発展を欲するが為にマナを消費しつづけるマニト。二者が争うのは自明の理って奴だ」

チエシヤ猫が語る世界は、やはり何処かで聞いた様なファンタジーな世界だった。

春は無意識の内に驚くほどに静かな口調で呟いていた。

「人間って、どこの世界でも変わらないんだね」

その言葉を聞いたチエシヤ猫は意外そうな顔で首をかしげ

「君は達観しているな……いや、諦観しているのかな？」

微笑と共にそう言った。

チエシヤ猫の言葉にハツとなり



「違うよ。それで、僕はそんな世界でどうしたらいいの？」

慌てて取り繕うようにそう言っただけで陣の中に一歩踏み込んでしまった。刹那、春の足元から輝きが増し、まるで染み渡ってゆくように陣全体が光り出す。

春の体が驚きで硬直し、その間にも光は増して、春の膝を超え、腰下まで届く。

戸惑っている春に、チエシヤ猫は増してゆく光など気にする事もなく話を続けた。

「さつきも説明したように、私達魔族にはマナは必要不可欠で、にもかかわらず私達の世界のマナは減少し続けている」

既に光に飲まれ、全身が光に埋もれてしまっている様な状態でありながら、チエシヤはまるで夜風に当たっているかのように心地よさ気に目を細めて

「それに比べて、こちらの世界はマナに溢れ、おまけに君達はマナに頼らずに生活している……だから、ちょっと分けてほしいのさ」  
光を弄ぶように尻尾を振りながら羨ましそうに言うのだった。

「分ける……？」

どうやら光は害がなさそうだと判断した春はチエシヤ猫に近づくように一歩踏み込んで問いかける。

すると、光が一段と強くなり、春の胸の辺りまで光が増した。

「この光はマナの光。私が作っただけでは微弱な反応しか示さないが、この光の量が、ハル君の持つマナの量なのさ」

光、マナの発する暖かな感触に身を委ねる様に、チエシヤ猫が言う。  
「でも、分けるっていったって、どうしたら……」

まるで噴水のように湧き上がる光が、春の胸元よりも少し上まで昇るころには小さく消えてゆく。

「何、難しいことじゃないさ。ハル君、我が主と契約する気はないかい？」

ふわりと、まるで光の水に乗っているかのように、チエシヤ猫が春の胸の高さまで浮かび上がり、尻尾を振りながら前足で耳を撫で付

けながら問いかけた。

「契約……それってどんなものなの？」

足を何かに押し上げられるような感覚を押さえながら、春が問いかける。

その間にも光は止め処なく湧き出し続け、チエシヤ猫がその上を泳ぐように転がる。

「簡単なことさ、ハル君たちの世界に溢れるマナを、契約というパイプを通して私たちの世界に流してもらいたい」

チエシヤ猫は言葉の端に、春自身の世界にはマナの需要が無い事を示唆していた。

しかし、その言葉を鵜呑みにして手放して信用してしまえるほど、春は子供ではない。

おそらくは契約というだけあって、マナを渡すことで対価として報酬、恩恵を受けるのだろう。

契約にはメリットとデメリットが存在する。メリットだけのおいしい話など、この世には無いのだから。

春はそこまで考えた後、チエシヤ猫の表情を読み取るために目を細めて思案する。

正直にデメリットを問うたところで、チエシヤ猫は上手にはぐらかす。

そういう事も考えられるのだ。そして、一度はぐらかされてしまえば、疑っていても、表立って質問する機会は逸してしまう。

そして何より、春自身にとってのメリットは何なのか。それを聞くことで、自ずと答えに通じる道が見えてくるのではないか……

小さく息を吸い、平静を顔に貼り付けて、春は問いかける。

「……チエシヤさん達の利点はわかったけど、それって、何か僕たちに利点はあるの？」

春の言葉に、チエシヤ猫は意外そうな表情で髭を揺らして、ごろんと転がって春の目の前で止まりながら

「ん。ハル君がそれを気にするなんて意外だね。てっきりハル君は

気にしないと思っていたけれど？」

などと尻尾を揺らす。

そんなチエシヤ猫に肩をすくめて見せ、春は静かに答える。

「チエシヤさんは、僕の事を買い被り過ぎだよ。別に、僕は聖人君子じゃ　偉大でも、聡明でも、ないんだよ」

「ハル君は誰かが困っていれば、そういった力とか利害とかを気にかけずに手を差し伸べるような人間だと思っていただけのだけど、違うのかい？」

耳を揺らしながら問いかけるチエシヤ猫は、どこか試すような口調でそう問いかけた。

「違います。それに……僕が気にしているのは、僕の一存でこの世界のマナをチエシヤさん達の世界に流したとして、それは僕達の世界に不利益にならないのかって事……」

答えた春の周りの光が、春に当たっては弾けて消える。

「なるほど、影響も含めて、君は周りの人たちを守りたいんだね？」  
「そうなりますね。僕だけならまだ、僕自身が納得していればいいですけど、周りの人は、やっぱり周りの人の事情がありますから、それを僕の一存でどうこうするのはちよつと……」

頬を掻きながら困ったように答える春に、チエシヤは笑いながら頭を前足で撫で付け

「良い子だね。だがその心配はないさ。契約によって君達が得る恩恵は、ハル君が選べるのだから」

毛繕いするように前足を嘗めながら答える。

「……僕が、選ぶ……？」

「そうさ。契約によって、ハル君は此方の世界の法則とは別の、私達の世界の法則を得る。ありていに言えば、《魔法》が使えるようになるって所かね」

「魔法……」

魔法という言葉に、春は改めて別の世界に思いを馳せる。

今起きている現象も既に、春の知っている世界とはかけ離れた光景

だったが、きつと、チエシヤ猫の住んでいる世界はそれ以上なのだろうと、今更ながらに意識させられた。

「その魔法をどう使うかはハル君、君自身が決めれば良い」  
チエシヤ猫は片目を伏せながら

「それで、もう一度。答えを聞かせてもらえるかな？」  
尾を振って期待するようにそう問いかけた。

春は静かに考えるように目を閉じて、光の奔流に身を委ねて体の力を抜く。

すると、まるで光そのものに質量があるように春の体が浮かび上がり、まるで水に浮くようにゆらゆらと光の上に揺らめくを感じながら

「……分かりました。あの子を助けてあげられるなら」  
すつと目を開き、チエシヤ猫の顔を正面から見据えながらそう答えた。

その答えに、チエシヤ猫は柔らかく微笑んで  
「ありがとう、ハル君は本当に優しい子だね。それじゃあ、行くとしようかね？」

そう言ってチエシヤ猫は滑る様に円の中心へ降り立つと、尾を振って振り返りながら春を見る。

「行くつて、どうやって？」

「円の中心においで。さあ、静かに、身をゆだねるように……そう、その調子」

「このままでいいの……？」

魔法陣の中心に、まるで光に囲まれるようにチエシヤ猫と春が立つ。  
「さあ、手をかざして……本来この魔法は飛ぶ先の世界を知っている者が魔法を使うことで発動するのだけだね。今は私が向こうの世界を知り、ハル君が魔法を使うことで起動しようつてわけさ」

春が円の中心に手をかざすと、ぼうつと光が強くなり、立ち上る光の奔流が春の頬を撫でる。

「……起動の方法は？」

目を細めてチエシヤ猫に問いかける春の髪を、まるで風が遊ぶ様に光の波が揺れる。

「意識を深く、そのまま……《隔たりし地への誘い、我呼びかけに答え、汝、道を示せ》こう言うんだ」

言われた言葉を頭の中で反芻し、春は静かに瞳を閉じながら言葉を口にする。

「……《隔たりし地への、誘い……我、呼びかけに答え、汝 道を示せ》……」

光が増して、周りの景色が急激に色褪せてゆく。

「素晴らしい魔力だ、これならきつと」

完全に世界が塗りつぶされる直前、チエシヤ猫の声が、そんな事を言っていた様だったが、春の耳には微かな風の音だけが響いていた。

風の音と、暖かな光。

急速に色褪せた世界に、景色が戻っていた。

春が目を開けると、そこには緑が生い茂り、近くで小鳥のさえずりが聞こえていた。

空には太陽が昇っており、体感的には春先の穏やかな風に乗って、さんさんと日差しを振りまいている。

先ほどまで日暮れだった面影は、もはやどこにもない。

「……ん、う……。ここは」

どうやらそこは森の入り口のような場所で、森の反対方向には地平線まで続くような草原が広がっていた。

草原の草が、風に揺られてまるで波打っているように光を反射する。その光景にすつと目を細め、春は森の方へ視線を向けた。

森を見上げれば、木々たちの中に一際大きな枝葉を広げる大樹を遠望で確認することができる。

そう、あの夢でみた、大樹の様な……巨大な樹のものだ。

身体を起こしてどこか怪我が無いか確かめたが、どうやら怪我らしい怪我は無いようで、春は制服姿のまま草の上に横たわっていたようだった。

「眼が覚めたかい？」

辺りを見回していると春の耳に木々の合間から聞き覚えのある声が聞こえ、春がそちらに目を向ける。

するとチエシヤ猫が丁度木々の間を潜って春の許へやって来る所だった。

しかし、春の居た世界で見た姿とは、どこか違う。

その違和感に春はすぐに気づいた。

額の茶毛が縦模様に入っている事や、金色の瞳はそのままだったが、まず、背中に透明な羽のようなものが二対生えており、斑色の尻尾が二本に増えている。

よくよく見れば、赤い首輪がない。どつりで鈴の音がしないと漠然と思いつつ

「チエシヤさん……ここは一体……」

問いかける春に、チエシヤ猫は双振りの尾を別々に振りながら

「ここが私達の世界。ハル君の言うファンタジーの世界、《フェミユルシア》だ。歓迎するよ、ハル君」

と笑い、ぱたぱたと羽が動いてまるで羽を使っているとは思えない緩やかな動作で浮かび上がる。

「……ここが、ファンタジーの……世界……フェミユルシア……」

まるで楽しむようにくるくると春の周りを飛び回るチエシヤ猫を目で追いながら、頭をめくらせてつぶやく。

「ついておいで。我が主の下へ案内しよう」

くるりと空中で1回転しながら木々の間、森になっている方へ飛んでゆく。

「あ、まってよチエシヤさんっ！」

チエシヤ猫の後を追って、春は森へと足を踏み入れていった。

森に踏み入った春は、その余りにも大きな自然の姿に目を奪われて

いた。

「……こんな大きな樹……いつからあつたんだろう」

樹の幹を支えに、巨大な木の根が地面に凹凸を描く不安定な足場を歩く。

その直ぐ先をばたばたと春の歩幅に合わせるように飛ぶチエシヤが答える。

「この辺はマナの恩恵が比較的強いからね。そのお陰で大きく育つたのさ」

その言葉に、春は森を見回しながら

「へえ……本当にマナって大切なんだね」

と呟く。

よくよく目を凝らすと、木々の間や土や、水、ありとあらゆる物が微かに光を放っていることに気づく。

その光は、春がフェミルシアへ来た時の青い光ではなく、木々の色を映した様な淡い緑色をしていた。

「そうさね。だからこの土地は豊かでマナを必要とする私達魔族が隠れ住むには丁度良い場所なのさ」

「……なるほど。でも、そんな土地なのに、何故チエシヤさんの主さんは僕を呼んだの？」

不慣れな道を歩きながらもチエシヤ猫に問いかけると、チエシヤ猫は春の方に向き直りながらバックしつつ話し始める。

「いくらこの土地が豊かといっても、それは限られた僅かなマナだ。我々が生きてゆくには心もとない。それに、その僅かなマナでさえ、

マナト……ハル君の世界でいう、人間に。脅かされている」

「……チエシヤさんの主は、マナトから、マナを守る為に僕との契約を……？」

春の問いに、チエシヤ猫は軽く首をすくめるような仕草をしながら答える。

「端的に言えばそうなるね」

「……」

顔をしかめて黙り込む春に、チエシヤ猫は首を傾げながら

「相手が人間と知って、嫌になつたかい？」

そう問いかけた。

春は静かに首を振り、根に躓かないように歩み寄り

「うん。でも、すぐに契約とは、いかないな。……ねえ、チエ

シヤさん。貴方の主さんと話をさせて」

と、チエシヤ猫の前足を握る。

「うん？」

「チエシヤさんの主さんが、もし人間を滅ぼそうとか、そういう事を考えているなら、僕は契約できない。でも、そうでないなら……僕は、協力してもいいと思ってる」

怪訝そうな顔をするチエシヤ猫に、春はそう言っただけで目を見据えた。

「……元々、我が主は人間に対して寛容だ。だからハル君の話次第では、私達が共に生きてゆける道も開けるだろうさ」

その視線から目を逸らすこと無く、チエシヤ猫は目を細めてそう答える。

沈黙が流れ、森の静寂さが耳を打つ。

ガサガサ。

木々の隙間を埋めるように生い茂る、春の腰程までの高さを持った植物で埋め尽くされた草むらが揺れて、何者かが春達　主に春の方を警戒しているようだった。

「ああ、周りの子達は気にしないで構わない。どちらに転んでも手は出さないように言っただけ」

チエシヤ猫の言葉に反応するようにあちこちの草が動き、そこに何らかの生物が潜んでいることを感じさせた。

しかし、一人として姿を見せるものは無い。まるで招かれざる珍客を遠巻きに値踏みしているように、または、狩人が獲物の隙を狙うかの如く。

先ほどとは別の意味で空気が張り詰め、春は辺りを刺激しないようにチエシヤ猫から手を離し辺りを見回す。



「歓迎は、されてないみたいだね」

「皆、人であるハル君が怖いのだ。ここに住む者は土地を追われた者。マニトに住処を奪われ、我が主の庇護下で寄り添って生きる者たちの集まりだから……」

木々の隙間に見える一際大きな、森の入り口からも枝葉を見ることができたあの大樹を見上げるように頭を上げながら嘯く様に答えるチエシヤ猫の声は、どこか悲しげな雰囲気を纏っていた。

「……チエシヤさん」

どう声を掛けたら良いか迷っていると、チエシヤ猫が春に向き直り「さあ、ここから先は一人でお行き」

先ほどの悲しげな表情とは打って変わった、感情を押し殺したような声色でそう告げる。

その言葉に応えるように頷いて春は一步前へ進み出て

「……わかりました。行つてきますね」

短く答えて大樹を見据え、顔を引き締めた。

靴が、獣の往来によつてできた不揃いな道を踏みしめる音だけが春の耳にやけに響く。

一步また一步、近づく毎に木々から発せられる光が力強くなってゆくのを、春は視界の端に捉える。

光が春に当たり弾けてはきえる。光が触れた場所がシャワーに当たっている時のような暖かな感覚に包まれる。

しかし、感触は雪のそれに似て触れた瞬間から溶けては消える淡い存在感が、空気の中にも満ち溢れていた。

「これがマナ……生きてゆくために必要な光……綺麗で、暖かい……」

誰にともなく呟きながら、春は樹の幹を支えに開けた場所に出る。正面に巨大な樹木が聳え立ち、方々に伸びる根の一つ一つが周囲の木々の幹ほどにもあるその巨大な樹は、根元が空洞になっているように根と根の間がまるで城門の様にぽっかりと口をあけていた。

根元の大地から光が溢れ、その光が絡み付いて大樹は周囲の輝きが

霞んでしまう程の光を纏っていた。

「……光のカーテンみたい」

光の城門をくぐり、樹で出来た城へ入る。

どうやら大樹は何本もの大きな樹が寄り集まって一つになった物らしく、所々天井から光が差し込み、そのお陰か中は意外にも明るかった。

春が空洞の中心付近まで歩いていくと、不意に頭に直接語りかけるような響く声がある。

『汝、何者なるや？』

唐突に降り注いだ声に、春の体が図らずも硬直する。

しかし、それ以上の変化は訪れない。

正面に見える池のような場所に、静かに水が流れ落ちる音だけが響く。

見えざる声の主に対して、春は言葉を選ぶように

「……僕は、チェシャさんに導かれてここに来た。チェシャさんの主さんと話がしたい。貴方が主さん？」

と、声を張り上げて問いかける。

春の問いに、声の主はしばし考えるように間をおいた後

『如何にも。我は聖域の守護者なり』

と、答えるのだった。

肩を竦め、これ以上面倒臭い事は省こうとでも言うように春は再度問いかける。

「……僕の事、見ているんでしょう？なら、姿を現してください。

僕だけ見えないなんて不公平だと思いませんか？」

今度の春の言葉にはすぐに反応があった。

正面に見える景色が歪み、池の上部が光に包まれる。

光が晴れて姿を現したモノを見た瞬間、春は驚きに今度こそ言葉を失った。

巨大な木の根に寝そべるように、春の方をじっと見据えるその姿は、まさしく、御伽噺やファンタジーの世界では最も知られた存在だろ

う、ドラゴン。そのものだった。

全身を覆う赤銅色の鱗がまるで鎧のようで、前足や後ろ足についた黒々と光る爪は鋭く、軽く踏みしめるだけで大地に大きな傷跡を残すだろうと容易に想像できた。

春をじつと見据える瞳は金色に輝き、伝説の生き物に相応しい格の様なモノを感じさせる。

『汝の望みは叶えた。まだ望む事があるのか？』

口を閉じたまま、頭に直接語りかける声が響く。

今度こそ間違いなく、春は語りかけてきている対象がドラゴンであることを認識した。

「…………… ありがとうございます」

あまりにも唐突で不条理な光景に、春は戸惑いながらもついお礼を言ってしまう。

『汝、我に何を求める？』

そんな春の様子などまるで意に介さず、ドラゴンはそう問いかけた。その言葉に、春は戸惑ってしまう。

「…………… 求めているのは貴方じゃないんですか？」

純粋な疑問が口をつく。

そんな言葉だったからこそ、ドラゴンは始めて眉を顰めて

『我が汝に何を求めていると？』

と、興味を示したように感情の籠った声音で問い返してくる。

「僕の世界のマナを、この世界に流すためのパイプ役を担う事です」  
チエシヤ猫に説明された事を思い返しながら、春は短く答える。

ドラゴンは僅かに鼻を鳴らして

『然り。ならば何故、汝は我と契約を望む？』

と、さらに問いを重ねてくる。

その問いに、春は困ったように、また、自身の考えを再整理する様に、躊躇いがちに口を開く。

「…………… 別に望んでいるわけではないですけど、この世界は、人間…

…マニト、というんでしたっけ」

春の言葉を、ドラゴンはただ黙って聞いている。

「彼らの犯した過ちで危機に瀕していると聞きました」  
倍以上もある体のサイズとは裏腹に、会話においては対等な関係を築けているように、緩やかな時間が流れてゆく。

春の言葉にドラゴンは肯定を示しながら、首を擡げて春を正面から見据えながら

『然り。だが、汝が契約する理由足り得るとは思えぬ』

鋭い金の眼光が正確に春の瞳を射抜き、二者の視線が交差する。

それでも、春は一步も引かずに

「……貴方は、マニトをどうしたいのですか？」

ただ静かに質問した。

『それは汝が望む理由に関係があるのか？』

質問の意図を掴みかねているのか、ドラゴンは目を細めて春に言う。

「僕は、貴方がマニトを滅ぼしたいとか。そういう事を考えているのであれば賛同しかねます」

春の事など、その気になれば一瞬で引き裂けるであろうドラゴンを前に、春は自分の正直な意見を、答えとして口にした。

真摯な態度といえは聞こえはいいかもしれないが、大よそ蛮勇、無知とも取れる春の行動を受け、ドラゴンの体中に張り詰めていた筋肉が弛緩する。

『我には我が聖域内の、我を慕っている者達を護る義務がある』

春の言葉を否定するように、ドラゴンが言う。

言葉自体は変わらないが、態度が明らかに軟化している事に春は気づく。

春はドラゴンと自身とを隔てている池の手前まで歩いてゆき、静かに腰を下ろして

「それで、君はどうしたいの？」

春は気づいていないだろうが、先ほどまでの固まった口調ではなく、春本来の、しかも、同年代や年下に向けて発する様な口調で問いかけていた。

器の大きさとも取れる春の態度に、ドラゴンは一瞬だが怯んだ様に鎌首を擡げて

『我は……出来る事ならばマニトと……人と争いたくはない』

今までの厳格な語り口ではない、歯切れの悪い言葉で、自身の心中を吐露したのだった。

不恰好だが、誠意のあるドラゴンの言葉。春は既に自身の中で決まっていた答えを口にする。

「……そういう事なら、僕も手伝えるかもしれせん」

『汝の目的は何だ？』

のっそりと、緩慢な動きで寝そべっていた樹の根の上に起き上がり、春を見下ろしながら問いかける。

木の根の高さとドラゴンの元々の高さが合わさり、まるで建物の三階にいる相手に話しかけるような高度差に、春は首を真上になるのではないかと思うほどに上げながら

「僕は、貴方を助きたい。貴方の理想が、敵を滅ぼす事にならないならば」

ドラゴンの目をまっすぐに見据え、聴き違いなど起こりようもない、静寂を突き破る声量で宣言する。

視線と視線がぶつかり、お互いの本心がぶつかり合う。

『初対面の者への言葉とは思えぬ。しかし、嘘を言っているわけでもない』

十数秒が何時間にも感じられるような静寂の中、ドラゴンの方が、とうとう折れたように体勢を元の寝そべった形に戻して春から視線をはずし、真下に広がる池に映る自身を見るように呟いた。

その言葉を聞いた春は、立ち上がったドラゴンに手を差し伸べる。

「……どうするかは貴方に任せます。契約するのか、しないのか。あれだけ言っておいて何ですけど、僕、どうしたらいいかなんてわかりませんからね」

苦笑交じりにそう言いながら手を突き出す春に、ドラゴンは一瞬呆気にとらたが、すぐに苦笑に乗っかり

『汝は愉快な人間だな』

と、半ば飽きた風な言い方で実に楽しそうに目を細めるのだった。ぐっと首が動き、ドラゴンの顔が池の水面近くまで迫り、春の目の前にとまる。

『よかるう。異世界の少年よ。我との契約を望むか？』

吐息のかかる様な距離で、ドラゴンはもう一度春に問いかける。

ドラゴンの生暖かい吐息を正面から受けても、春は眉を顰める事すらせずに

「貴方さえよければ」

と笑いかけた。

春の態度にドラゴンはまるで親が子に優しく教えるように

『ならば我が名を呼ぶがよい』

と言つて頭を突き出した。

「名前……？」

『我に名はない。故に汝が名付けるのだ。契約者として』

ドラゴンの言葉を受けて、春はしばらく考え込むようにドラゴンを見ていたが、ようやく心積もりが決まったように口を開く。

「……貴方の名前」

『決まったか？』

目を細めて尋ねるドラゴンに、春は心を落ち着けるように深呼吸してから頷いて

「シンクさん。なんてどう……かな？」

と、少し遠慮がちにそう言った。

『シンク……何か意味はあるのか？』

ドラゴンは自身の新しい名を吟味するように反芻して春に問いかける。

軽く頬を染めて、照れるように頬をかきながら

「貴方の体が、とても綺麗な赤色だから。僕の国では、真なる紅、深き紅と書いて、真紅、深紅って言うんだよ」

ぼつりぼつりと答える春に、ドラゴンは得心いったという風に軽く

頭を揺らして

『なるほど……良い名だ』

と、微かに笑ったようだった。

「……僕の名前は小柳春。春でいいよ。よろしくね、シンクさん」  
ドラゴン　シンクの頬に手を当てながら、春がはにかむように笑う。

春の名前を聞いたシンクは驚いたように目を見開いて春の顔をじっと覗き込む様に黙り込んだ後

『ならば我が名はシンクでよい。ハル、その名、確かに胸に刻ませてもらった』

得心いったという風に軽く頷き、緩やかに目を細めて笑うように答えた。

刹那。春とシンクの触れる間が眩く輝き、春は驚きのあまり目を覆ってしまふ。

瞳の奥が、ジンと熱く痺れる感覚に襲われる。

「うっ、ぐう……っ!？」

目を押さえて春が呻く。

その間にも光は輝きを増して、空間全体を埋め尽くさん勢いで拡散して、光の波となって樹の外へ漏れる。

突然の輝きに鳥達が驚き、木々から飛び立ってゆく……。

その光景を遠くから眺めながら、チエシヤ猫は小さく呟いた。

「……契約が、成った」

光が緩やかになり、徐々に発生源であるシンクと春に収束し、やがて消えた。

「……うっつ。一体、何が……」

春が呻きながら目を開くと、視界に変化が訪れていた。

「……え、これは……?」

自身の周りに光が漂い、緩やかに流れ行く様が手に取るように感じられる。

それは水底から湧き上がり、シンクと春を包み込むように緩やかに流動して、空中に消えてゆく。

「契約は完了した」

先ほどまでとは違う、明らかな肉声に思わずびくつと肩を揺らして春が反応すると、シンクは愉快そうに笑い声を上げる。

「はっはっは。何を驚いている。契約したのだ、我の言葉がわからないのでは話にならないだろう」

そっぴいっつつ緩慢な動きで木の根を降り、池の畔に腰を落として尾で春を囲い込むように座るシンク。

「え、でも、さっきまで普通に会話していたような……」

尾に抱かれるような形になりながらも、高い位置にあるシンクの顔に向かって困惑気味に言う

「先ほどまでのハルの世界の、ハルの言語に合う様に調整した言語魔術の一種だからな」

シンクは事も無げにそんな事を言いながら春の方を向く。

「この状態は、契約者になったから？」

今の春には、ドラゴンであるシンクが、口を動かして普通にしゃべっているように見えているのだ。

それどころか、先ほどまでは理解できなかった行動が、今は普通の人のそれと変わらない、ただの友愛表現であるとわかる。

「契約を通して、我とハルはリンクしている。だから今の私にはハルを通してハルの世界がわかるし、ハルもわかるはずだ、私を通してこちらの世界、こちらの言語、我々の言語についても……」

シンクの言葉に連動するように、春の頭の中に言語や事象、歴史や感情など、フェミユルシアのあらゆる知識が間欠泉のごとく湧き上がってくる。

「……え、うわっ！何、これ……あ、ああ」

突然、意識の海に濁流のように押し寄せたシンクの情報か頭を埋め



尽くし、混乱する春を諭すような調子で

「落ち着け。我の声を良く聞くんた。今は煩雑とした情報が溢れているだろうが、じきに収まる。ゆっくりと、自分が今必要としている事だけを考えろ」

とだけ言つて、シンクは尾の先で春の頭をなでるようにする。

しばらくその状態が続いた後、春は荒くなつた呼吸を落ち着けるように深呼吸を繰り返しながら

「……もう、大丈夫。この世界は、大変なんだね……」

と、憔悴しきつた顔でシンクに言った。

そんな春にふつと力を抜いた様子で笑いかけて

「ああ。我はこの世界が好きだ。そして何より、我を頼ってくれている者たちを救いたい」

と目を細めるシンク。

シンクに力なく笑いかけてから

「わかるよ。そういう想いも、さっき、受け取つた」

と、春は顔を引き締めながら言う。

そんな春に言葉をかけようとしていたシンクがぴたりと動きを止め、一つの場所に意識を向ける。

春も釣られて其方へ注意を向けると、かさかさ草が揺れているのに気がついた。

「……出ておいで。隠れてなくても大丈夫だ。この人間、ハルは味方だ」

優しく諭すような調子で言うシンクに、草むらは一層激しく動き

「い、居ない！居ないもん！！」

……絵に描いたような反応が草むらから返ってくる。

明らかに幼さがむき出しになった様な少年風の声に、春は微かに力が抜ける。

しばしの沈黙の後、諦めたように姿をあらわして怒られまいかとびくびくするその姿に、春は思わずぽつりと呟いた。

「……狼？」

眩く春に、シンクは

「最近移り住んできたウルフの子だ」

と喋って相槌を打つ。

「ウルフ……可愛いね」

シンクと春、聖域の主と見知らぬ人間の二人に見つめられ、震え上がって今にも泣き出しそうな子犬さながらの姿に、春は思わず感想を漏らす。

耳をぱたぱたと動かしながら、ウルフの子がおずおずとハル達に近づいてくる。

そんなウルフの子をあやすようにシンクがウルフの子に高さを合わせてたしなめる様に

「今日は一人かい。駄目じゃあないか。君はまだ子供なのだから、お母さんから離れていては、何かあってからでは遅いのだぞ」

と言うと、ウルフの子はふるふると首を振りながら、今度は春に顔を向け

「うー。だってー。お母さん、狩りに行ったまま戻ってこないんだもん。……そのお兄ちゃんって魔族ー？変わった格好してるねー」

と問いかけてくる。

少年の様な可愛らしい声で問いかけてくるウルフの子に、春は思わず笑いながら

「ふふふ。僕は人間だよ。シンク……主さまなんだっけ。とお話しに来たんだよ」

と説明してあげると、ウルフの子は心底驚いたと言う風に

「えー！ぬしさまとお話しにきたの！？すごいなー！！ぬしさまとお話できる人間なんてそうそういないよー！」

今度は春の事を尊敬の眼差しで見始めた。

キラキラと好奇心に輝く目を向けられ

「シンクに話をしにくる人間は、そんなに少ないの？」

春は首を傾げながらウルフの子に問いかける。

すると、ウルフの子はさも自分のことかのように自慢げに説明して

くれるのだった。

「そうだよっ！この森の皆を悪いやつらから守ってくれてるんだ！この森がきれいなのも、みーんなぬしさまのお陰なんだってお母さんが言ってたよ！」

「そうなの。すごいんだねー」

春が相槌をうつてやると、ウルフの子はうれしくてたまらないといった風に春の周りを駆け回りながら

「ぬしさま！このお兄ちゃんってすごいんだね！お兄ちゃん、お兄ちゃんってなんていう名前なの？」

と言っではしゃぎだす。

「僕は春。小柳春だよ。よろしくね。ええっと……」

名乗った後、春はウルフの子の名前を聞いていないことに気づき、自分も聞き返そうとするが、ウルフの子は名前が聞いたことでそれどころではないらしい。

「ハル兄ちゃんだね！ハル！ハール！」

と言っ、春の周りをぐるぐると駆け回り、何度も止まっては尻尾を振り、そしてまた走り出し、止まっでは耳をぱたつかせ、また走り出すと言っサイクルを繰り返し始める。

「あはは……」

苦笑してその光景を見ていた春に

「随分と気に入られたようだな。仲良くしてやってくれ」

とっ、シンクが春の真上でそう笑いかける。

「可愛いですね」

「ああ、我はこの子らを守るためにも。力が必要だったのだ」

シンクが目を細めてそういうのを聞いて

「そう……」

春も柔らかく微笑んだ。

そんな二人のことなどまるで気にしていない当のウルフの子はぱたぱたと尻尾を振って

「そういえば、ハルはなんでぬしさまの事をシンクって呼んでるの

？っていつか、何でボクの言葉がわかるの？お母さん言ってたよ？  
マニトは私達の言葉がわからないから近づいちゃいけないって！」  
矢継ぎ早に質問を浴びせかける。

春はウルフの子のやんちゃな様子に苦笑しながら一つ一つに丁寧に答えてやる。

「ええつとね。ぬしさまは僕と契約して、シンクって名前になったんだよ。君の言葉がわかるのは、シンクを通して君達の言葉が分かる様になったからだね」

懇切丁寧な説明にもかかわらず、ウルフの子は話の半分も分からなかったのか

「へえー！すごいすごい！よくわからないけどハル兄ちゃんってすごいんだねっ！！」

と、何度もすごいを連呼しながら春の胸に飛びついて頬をなめる。

「あははっ、くすぐりたいよ。遊んであげるからちよつと離れて」  
ウルフの子になめられながら撥ったそうに身をよじって春が笑ってウルフの子を抱き上げながら言う。

すると、抱き上げられたのが嬉しかったのか、尻尾や耳、感情が表現できる物はおおよそ全て使って喜びを表現する。

そのままじゃれあい始めた春とウルフの子を微笑ましく眺めながら、シンクは騒ぎ出した外の喧騒に耳を傾けていた。

その喧騒は徐々に近づいてきて、自然の城門を潜り抜けて顔を出したチエシヤ猫の姿は、どこか逼迫した雰囲気醸し出していた。

「我が主！ハル君、大変だ。マニトの軍勢が此方へ向かっている。間もなく森の入り口に」

矢継ぎ早にそう告げるチエシヤ猫の目が、ウルフの子とじゃれあう春と、どこか遠くを見ているようなシンクを捉える。

「……前もあつたんだっけ」

ウルフの子を引き剥がしながら問いかける春に、シンクは軽く首を縦に振って肯定し

「そつだ。前は我が前線に出るまでもなく終結したが、今回はそ

「うもいかないようだ」

目を細めてまた遠くを見るような仕草で森の入り口の方向に顔を向け始める。

「……わかるの？」

尋ねる春に顔を向けず、ただ当たり前という風に

「《ヴィジョン》の魔法を使つてるといい」

とだけ言つて外に注意を向け続ける。

春は言われたとおりに《ヴィジョン》というものを使用しようと、その情報を頭の中で思い起こす。

すると、まるで知つているのが当たり前の様に、術の効果や詠唱、マナの扱いなどが春の頭に呼び起こされた。

「《ヴィジョン》……これかな。《遠き憧憬を模る眼、まなこ瞳に宿りし万象を示せ》」

ぼつぼつと、まるで夢見心地のように詠唱を口にする。

ヴァン……

微かな音と共に、透明な台の上に水をたらしたような薄い膜が春のすぐ目の前に展開され、その中に森のすぐ外の映像が鮮明に映し出される。

森の入り口に向かって進軍してくる画一の鎧を身に纏った軍勢が、すでに森の手前にまで迫っていた。

遠くを見るのを止め、春の作り出した映像を覗き込むようにしていたシンクが重々しく口を開く。

「これは、森に入る前に撃退するしか……止む負えまい」

シンクの言葉に、映像から目を離して

「……僕はどうしたらいい？」

問いかけた春に、シンクは緩やかに首を降つて

「ハルに人と戦えというのは酷だろう。ここで待っているといい。」

本来ならば戦いに巻き込む前にルグラへ返してやりたかったが「

言いかけたところで、一緒になつて映像を覗き込んでいたウルフの子が叫んだ。

「お母さん！お母さんが映ってる！！」

「っ！？」

慌てて映像を操作し、ある一点に焦点を当てる。

すると、ウルフらしき魔物が、森の外周に集まりつつある魔物たちの先頭に立って人間の軍勢を睥睨しているところだった。

「あれが君のお母さん？」

問いかける春に、ウルフの子は答えない。

ただ、たつと駆け出したかと思うと

「助けに行ってくる！！」

それだけを言い残して走り去り、すぐにその姿は草木に隠れて見失ってしまう。

「あ、まって！！！！」

叫んで、ウルフの子に続くような形で春が飛び出してゆく。

「ハル、待つんだ！！ハル！！！！」

シンクの静止の言葉は、春には届かなかった。

春の姿はシンクの声が届くよりも先に、その場から消えてしまっていた。

森と外の境界では、膠着状態が始まっていた。

ゲルルルル。

方々から姿を見せないまま唸り声を上げる獣達と、赤を基調に黒や金の刺繍を施された軍旗を掲げたマニトの兵団。

その双方が、お互いの指揮官からの命令を待つような静けさで対峙していた。

その最前線で、一匹のウルフが遠吠えをする。

ウオオオン ……

森中を声が伝播する。それに釣られる様に、様々な声が森中から木霊して地響きを立てた。

「魔物共が。前回と同じように行くと思うなよ……何せ今回は前回の一個師団など比ではないほどの軍を率いているのだから」

しゃりしゃりと甲冑が揺れ、馬上にまたがった恰幅の良い髭面の男が、自慢の髭を撫で付けながらほくそ笑む。

「おい、魔術師、この森に魔光石が大量にあるというのは本当なんだろうな？」

すぐ脇に控えたローブをすっぱりと被った如何にも怪しげな雰囲気醸し出している人物に、髭面の男が問いかける。

それに答えるように魔術師は低く笑い、森を見据えながら髭の男には見えない何かを見る様に指で示しながらぼそぼそと呟く。

「ヴァーブルク將軍には何の変哲もない森に見えましようが、私にはハッキリと感ぜますぞ。私の持つ魔光石が溢れるマナに歓喜しているのが……」

みれば、魔術師の手に握られた杖の先の宝石の内側から発せられている淡い光が、森に近づけるたびに光度を増すようだった。

その様子をうつとりするように眺める魔術師に、髭面の男、ヴァーブルクは鼻を鳴らし

「ふん。魔光石さえ手に入ればそれでいい。しかし、こんな辺境の森にそれほどの魔光石が眠っていたとはな」

舌なめずりする様に卑下した目で森を俯瞰する。  
その視線が、真っ向から威嚇するウルフとぶつかって止まる。

「どうやらあのウルフがリーダーのようですね」  
魔術師の言葉に、ヴァーブルクは小さく

「面倒だ。射殺せ」  
とだけ命令する。

魔術師は恭しく傳いて  
「御意に御座います」

と言い、ウルフに狙いを定めるように杖を構えた。  
魔術師の動作を警戒する様に森がざわめく。

ウルフが唸りをあげるが、魔術師は気にした風もなく詠唱を始めよ

うとしていると

ガサガサ。

慌しく草木が揺れ、木々の隙間から小さな影が飛び出してくる。その影はウルフに駆け寄ると、小さく高い声で吠え立てていた。杖をやや下げて魔術師が問いかける。

「……どうやらあのウルフの子供のようですね。どういたします？」  
ヴァーブルクは詰まらなそうにウルフの子へ向けていた視線を外し、ただ淡々と

「邪魔なモノは総て殺せ」

と命令を下す。

魔術師はひとつ小さく頷くと、先ほどと同じ高さへ杖を構えなおしてウルフの子へ狙いを定める。

「《世界に偏在する輝ける力、我が意思に従い敵を討て》  
《エナジーランス》」

まるで周囲の空気を威圧するような重い言葉が、魔術師の周囲のマナを従える。

杖に嵌め込まれた魔光石が輝きを増して、周囲のマナを練り上げる指針となって一筋の光を紡ぎ出す。

その光が限界にまで膨れ上がった瞬間、爆発するように杖を離れ、一直線にウルフ達へと向かう。

ズバン！

空を裂く様な音と、獣の悲鳴が森に木霊する。

光の槍が飛来する直前、ウルフは我が子に狙いを定めたその前に立ちふさがるように俊敏に駆け、光と子供の間へ割って入っていた。しかし、その捨て身の行動すらたやすく貫いて、ウルフの体を貫通した光の槍の一部がウルフの子の脇腹に深々と突き刺さり、四散する。

槍が消えた直後、焼けたような焦げ臭さと、獣の血が地面に赤い染みを作り、ウルフ共々崩れ落ちるように倒れた。

その光景に、群集はざわめきながらも歓声を上げ、不審げみていた



者までもが魔術師を畏敬を込めた目で見始めていた。

力なく崩れ落ちるウルフを見て、ヴァーブルクは満足げに髭を摩り「ふん。子を庇ったか。しかしそれすらも貫くとは、魔術師風情と思っていたが、中々どうして使えるではないか」

先ほどまでの不審を隠そうともせずと言うヴァーブルクに

「お褒めにあずかり、光栄でございます」

魔術師は傳きながら答える。

「しかし、まだ子供は生きているようだな？生かしておいて後々復讐心を持たれても困る。処分しておけ」

弱弱しく痙攣するウルフの子を睨みながら、ヴァーブルクは冷徹に命を下す。

魔術師も小さく頭を垂れ、先ほどと同じ詠唱を口にする。

杖から発せられた光が槍を象り、《エナジーランス》が今にも命が果てようとしているウルフの子へと襲い掛かった。

光が着弾する瞬間に強く輝いて視界を埋め、土砂が舞い上げられて砂埃となって視界を塞ぐ。

風に流されて土砂の膜が晴れ、弱くなった光に目が慣れてくるにつれて、ウルフの子が立っていた位置に何者かが立っていることに気付く。

「……はあ、はあ。間に あわなかった」

肩で息を切らせ、ウルフの亡骸と瀕死の子供に視線を落としながら、一人の少年が呟いていた。

柔らかかそうな茶髪が太陽の光に照らされて赤茶色に見える。その髪と同じ色をした瞳が、悲しみに揺れて

「ごめんね。間に合わなくて……」

呟きながら、ウルフの子にそっと手をあてがい、ぼたぼたと頬を伝って涙が落ちる。

「何者だ。マニトならば名乗りを上げよ」

ヴァーブルクが声を張り上げると、少年はすっと立ち上がり、先ほどまで見せていた悲しい表情が抜け落ちた様な冷めた雰囲気をもと

つて、ヴァーブルクを見据えた。

「……何者なんて、貴方達に聞きたいですよ」

静かに答える少年の声に覇気はない。ただ、淡々と言葉をつむぐ。そんな少年の異様な雰囲気飲まれることなく、ヴァーブルクは力強く宣言する。

「我らはガルデコール帝国第4師団である。貴様こそ何故マニトでありながら魔物の住処から現れた！答えよ！貴様は本当にマニトか！」

声を張り上げて詰問するヴァーブルクに対し、少年は静かに答えた。

「僕は春。貴方達と人間です。……何故、この子を撃つたのですか？」

春は問いかける。ただ、純然たる意思を確認するように。

ヴァーブルクは春を嘲弄するかのように鼻で笑い

「ふん。マニトならば魔物を狩って当然の事、魔光石を独占する卑しき種族を討伐して何が悪い！」

と、腰にさげていた剣を抜き放つて春に突きつけるように向ける。

無表情に近かった春の表情が揺らぐ。

ただし、それは剣を向けられた恐怖ではなく、ウルフの子へ向けられた悔悟と、自身へ向けられた無力感故に。

「愚か……なんて、身勝手なんだろう。そんな事のために、この子は、この子は」

ゴウッ

春の体から光、純粹なマナがあふれ出し、青の粒が溢れては消える。それに反応するように、魔術師の持つ杖が震えだして光った。

「な。何というマナ……將軍、あの者は人間ではありません。あれこそ、この森を治める魔族でございます」

震える杖を押さえるように握り締めながら魔術師が言うと、ヴァーブルクは小さく笑って

「ふん。ようやく本性を現したか。化け物め。魔術師よ、奴を撃ち殺せ」

と、魔術師に命令を出した。

魔術師は杖を両手で握り、狙いを定めるように構えて慎重にマナを練り上げる。

魔法を使う者にしかわからない圧倒的な威圧感。

それほどまでのマナを、制御するわけでもなくただ溢れるままに放出する目の前の敵に、魔術師は困惑していた。

どれほどの威力ならば足りるだろうか。自身の制御できるマナはどれほどか。

そうした思考の下、魔術師の構えた杖に、先ほどとは比べ物にならないほどに強い光が纏う。

「《世界を導く覇者の煌きよ、我が身に依りて敵を穿て》……

《ピアシングエナジー》」

一際強い光が瞬き、巨大な光が螺旋を描くように幾つもの光を纏って春へ殺到する。

光が届くよりも早く、春は無意識に手を向けていた。

混濁する思考に、様々な光景や記憶がフラッシュバックする。

赤い髪の少年が石を投げられている光景。

その少年と、森の奥で出会った記憶。

柔らかな日差しと少年の無垢な笑顔が焼け付いて、血まみれのウルフの子へと摩り替わる。

激痛にも似た感覚が胸の奥に刺さって、春は押さえ込むように片手で胸に当て、痛みと怒りとがけない交ぜになった視線を光に向けた。

バシユ……ジジ、ジジジ……

春の眼前にまで迫っていた光の奔流が、まるで半透明の壁のような薄赤い膜にぶち当たって光の粒を火花のように散らせた。

光は膜に触れた部分から淡くなり、徐々に薄赤い膜の中へ溶けて行くように消え始める。

すべての光が掻き消えた後には、無傷で涙を流す春の姿だけがあった。

森の前で、まるで守護神のように超然と立ち塞がる春の姿は、光が

晴れると同時に変化していた。

先ほどまでの太陽にすけるような茶色の髪が、まるで赤い膜の色素が移り込んだように燃えるような赤になり、龍を象る様な光が茶色の瞳の奥に宿る。

「……倒さなきゃ。守らなきゃ」

ぶつぶつと呟きながら、よろよろと覚束無い足取りで一步前へでる春を、魔術師は驚きのあまり呆然と眺めていた。

「何だ、あの防御魔法は……見た事がない、まるで、まるで 伝説の魔物のようではないか！！」

自身の最高の攻撃をあつさりと防がれた魔術師はその場にへたり込み、この世の終わりを見るような絶望の眼差しで春を見る。

先ほどまでの魔術に歓声を上げていた兵たちも一様に黙り込み、目の前に立ちふさがる得体の知れない少年に対して動揺が広がってゆく。

その中でもヴァーブルクだけが未だに戦意をメラメラと燃え上がらせていた。

「ひるむな！人に化けていようが魔族のたかが一匹！数の上の勝利は揺るがん！全軍突撃！！」

魔術師はもう使い物にならないと見切りをつけ、剣を掲げて手綱を引き馬を走らせる。

勇猛果敢に駆ける指揮官に触発されてか、兵士たちも遅れながらも声を張り上げて春に殺到する。

響く怒号。ヴァーブルクに続くように兵士が駆ける。

「……  
《大地に潜みし断罪の牙よ、汝を穢す咎人を搦り潰せ》、  
《ストーンファンク》」

手を緩やかに動かしながら、春は歌うように口を動かす。

口から零れ落ちるのは、春の知らない魔法の詠唱。

しかし、春の頭には既にどのような魔法かが鮮明に浮かび上がっていた。

瞳の奥の龍の灯りが一層強く輝き、髪の色が増す。

春から溢れ出す青色のManaが、大地の染み渡って色を変える。そしてそのManaに触発され、大地が隆起して数多の槍の様に鋭く尖ってゆく。

大地が作り出した無数の牙は一様に先陣を切るヴァーブルクへ殺到し、ヴァーブルクの駆る馬を、そしてその上に騎乗していたヴァーブルクを打ち落とし、大地へ引き摺り下ろした。

「ごがつ！？ いったい、何が」

突然の出来事に動揺しつつも、地面を転がるようにして衝撃を殺してすぐに体勢を立て直せたヴァーブルクは、やはりさすがと言ったところだろう。

幾戦もの戦場を駆け抜けた武将として、ただで地に足を突くわけには行かないと、すぐに剣を構えて春を睨む。

隆起した大地の刃が障壁となり、ヴァーブルクと兵たちが分断されて兵たちが足止めされ、ヴァーブルクと春のみが森側に取り残される形となる。

巨大なManaに操られた大地の変容を目の当たりにし、魔術師が驚きを隠そうともせずに呆然と呟く。

「馬鹿な……あれが《ストーンファンク》だと……あれではまるで中級魔法ではないか」

春の放った魔法、ストーンファンクは地属性の中でも最も扱いが容易く、魔術をかじった事のあるものならば誰もが知っている初心者向けの魔術。

当然魔術師はその魔術を知っていた。しかし、その威力は熟練の術者の放つ、範囲総てを支配する中級以上の魔法のそれだった。

「ふん、俺との決闘を望むか。魔族にしてはその心意気やよし。その勝負、受けて起とうではないか！」

剣を正眼に構え、ヴァーブルクが言う。

その言葉に、春は初めてヴァーブルクが目の前にいる事を認識したように視界の焦点を合わせて

「……貴方が、指揮官？」

呟くように問いかけた。

その姿は戦場に相応しくない、ルグラの制服姿。細かく見なくとも武器など持っていないことがすぐにわかる。

本来ならば得物も持たない少年に対して武器を構える事そのものが騎士道に反しているが、先ほどの攻撃をみてまだそれを考えられるだけの余裕を、ヴァーブルクは持ち合わせていなかった。

もとよりヴァーブルクは騎士道よりも勝利を重んじ、時には降伏を持ちかけられる戦であっても手を抜かずに敵を一掃する。そういう人物だった。

「如何にも。我が名はガルデコール帝国きつての名門、グレイル家当主、ヴァーブルク・グレイルである！」

警戒を解かず、堂々と名乗りを上げるヴァーブルク。

春はそんなヴァーブルクにさして意識を向けている様には見えない。ただ、定まらない視点で、混濁する意識で、戦いを終わらせるための知識を思い描いていた。

敵の指揮官を潰す。圧倒的な力で。

既に混乱している兵士たちにとっては、おそらくそれだけで決め手となる事。

結論に至った春は、それが何を意味するかを吟味することなく、普段ならばとらないだろう選択肢を、選択する。

「いざ、尋常に勝負！」

ヴァーブルクは声を張り上げて春に疾駆した。

その恰幅のいい体からは想像もつかない様な俊敏な動きで春に肉迫する。

しかし春はそんなヴァーブルクに対して、何もしなかった。

ガギッ、ギギッ、ギ……

「……」

鉄が何か硬いものにかみ合うように、ぎちぎちと不快な音を立てた。春はその場から一步も動かず、何もしていない。

ただ、春とヴァーブルクの振り下ろした剣との間に、先ほども現れ

た赤色の薄い膜が現れ、攻撃を受け止めていた。布かゼリーの様に柔らかくみえるその薄い膜だったが、しかしヴァーブルクの渾身の一撃をいとも容易く阻み、春に凶刃が近づくことを一切許さない。

「ぐ……なんだ、この障壁は……っ!!」

力を込めた事で額に血管が浮き上がり、踏み込みを強くすればその分地面が抉れる。

そんなヴァーブルクを冷やかな目で見据えながら、春は小さく呟くように

「竜鱗はあらゆる攻撃を拒み、その一切を許さない」

とだけ答えて、目の前で止まる剣に手を伸ばす。

咄嗟に身を引いて体勢を整えるヴァーブルクは、次の瞬間には自身の判断が英断だった事を認識する。

「……敵を討て エナジーランス」

詠唱を省略して春が術を唱える。

手の先に光が集まった瞬間、先ほど魔術師が放った魔術とは比べ物にならないほどに巨大な光の槍が剣のあった場所を焼ききって、大空の虚空へと巨大な柱のように駆け抜けた。

「なるほど、マニトの魔術師が使う術など、兎戯に等しいというわけか……っ!!」

飛びのいた際に髪が乱れるが、そんな事を気にする余裕などあるはずもなく、ヴァーブルクは言う。

自身の声が微かに震えていた事など、気付けるはずもない。

初撃を外した春は無言のまま照準を合わせる様に手を前へ、ヴァーブルクの方へと向け

「《穿て ピアシングエナジー》」

続けざまに魔術師の使用した術を唱える。

先ほど魔術師が使った《ピアシングエナジー》は、巨大な光の周りに幾つもの細い光が螺旋状に絡まって貫通力を増す魔術だった。

しかし、春の詠唱を省略してぞんざいに放った《ピアシングエナジ

―』はそのあり方を著しく変えていた。

巨大な光の槍の周りを、光の剣が幾つも重なり合い、さながらドリルの様に巨大になった先端が、まるで大気すらも穿ち削るように、ヴァーブルクへと殺到する。

「ぐうっ!？」

光る螺旋を紙一重で避け、ヴァーブルクは地面を転がる。

螺旋が射線上の総てを巻き込んで、春自身が作り出した大地の障壁を抉り取った。

その隙を突いて兵たちが乗り込んでヴァーブルクを守るように立ち塞がる。

「將軍をお守りしろ!」

「無事ですか!將軍!」

口々に言葉が飛び交い、春に向かって剣を抜く。

目の前の得体の知れない存在から少しでも遠ざかろうと、ヴァーブルクと共にじりじりと後退する。

その様子を漠然と眺めながら、特に制止や牽制などする様子もなく、春はただ呟く。

「……星を抉る収斂されし神の裁き、眼前の総てを等しく世界の欠片へ戻せ」

春の体から湧き上がる青いマナが輝きを増し、その総てが掲げられた春の手に集まってゆく。

大地の壁が抉れ、視界が開けたことで魔術師が春を視認し、その詠唱の意味を知るこの場にいる唯一人物である魔術師は、今度こそ静かに地に手をつき、打ちひしがれる様に声を絞り出す様に呟いた。

「……あの詠唱は、はるか太古に失われた神々の呪文…ロストスベル遺失魔法…

…そんなモノを扱える者が、存在するなど……」

魔術師の言葉を聴いている者はいない。

ただ、眼前に広がる圧倒的な力を発する光の塊に息をのみ、春に切りかかる事すら忘れて呆然とその光景を見ていた。

「……潰えて消える。《イレイジングコメット》」



焦点の定まらない視界、その総てをただ潰す。

深く物事を考える事も出来ないほどに混濁した思考、春の頭にはただその言葉だけが渦巻いていた。

頭上の光が消え、次の瞬間には遙か天空に太陽が二つあるのではないかと思つほどに光り輝く球体が浮かび、それは後退していた帝国軍に急激に落下してゆく。

「う、うわあああああああ!!!」

兵士たちの悲痛な叫びが響き、昼の平原に光の星が落ちた。

瞼の上から目を焼く様な圧倒的な光の渦。

兵士たちの声という音すら飲み込む衝撃が響き、森の木々が嵐に遭つたように揺れる。

光が弱まりつて、やがて色彩が戻ってくる。

先ほどまでは緑が生い茂り、どこまでも続くように広がっていた平原。

その平原の森の手前に広がる部分がごっそり吹き飛んで、隕石がぶつかった様な巨大なクレーターが出来上がっていた。

クレーターの中心、驚き、口を閉じる事すら忘れて、ヴァーブルクが乾いた声を漏らす。

「……こんな、事が……」

ヴァーブルク達の立っていた場所のみ、元の平原の草地が無傷で残されていた。

その頭上、軍全体を覆うように、赤く薄い膜のようなものが揺らぐ。

「愚かなる人の子よ」

軍や春、森の魔物など別け隔てなく。頭に直接語り掛けて来る様な声が響いた。

「な、何者だ!!!」

正気に戻つたように顔を上げて立ち上がったヴァーブルクが叫ぶ。

すると、森の奥から大きな羽音と共に赤銅色の巨大な影が飛来して、春のすぐ後ろへ着地して大地を震わせた。

「ド、ドラゴン……そんな、化物に加えて、ドラゴンまで……」

兵士の誰かが、絶望と驚愕をない交ぜにしたような、震える声色で言う。

フェミュルシアでも、ドラゴンの存在は伝説として語り継がれていた。

神話の中にしか存在しない架空の、そして圧倒的な力を持つ、最強の魔獣。

実際に見たものは存在しないとまで言われた伝説上の存在が目の前で翼を広げ、春と名乗った少年を抱く様に頭を垂れる。

『汝らに命がある事、我らが主の恩情である事を努々忘れるな』

大気を震わせる咆哮。木々がざわめき、赤い膜の結界が音もなく崩れ落ちた。

目の前の軍勢に、ドラゴンは睥睨しながら言葉を続ける。

『我が名はシンク。古の神と共に生き、この世界を見守る守護者である』

名乗りを上げ、翼を広げるシンクに、帝国軍は言葉もなく一步、また一步と退く。

『このお方は我らが主にして我が契約者。我が君の力の程はよく知れておる』

前足を一步踏み出してシンクが威圧すると、大地がビリビリと震えて巨大な足跡が刻まれた。

『去るがいい。今退くのであればあえて追おうとはせぬ。しかし、次はないぞ』

そう言つて天へ向けて咆哮を発すると、音が火を纏い、まるで太陽から溢れた火が天を焦がすように吹き上がる。

その光景と言葉で完全に心が折れ、帝国軍はもはや武器を構える物はおろか、武器を取り落とし、目の前の伝説上の化物を惚けた様に眺めている者がほとんどだった。

「ひ、に、逃げる！ 魔王、魔王だあ！！！」

誰が叫んだのかは定かではないが、その言葉が決定打となったのは疑いようが無かった。

触発されるように我先へと撤退し、遠く小さくなってゆく兵士達を見ながら、春の思考は徐々に落ち着きを取り戻していった。

『落ち着いたか?』

先ほどとは打って変わった優しげな声音が頭に響き、春はゆっくりとシンクの方へ向く。

「……僕、一体……何を」

こめかみを押さえながら呟く春の視界の端に、ウルフの子が目に戻る。

「……そうだ、大丈夫!？」

慌てて駆け寄ると、ウルフの子はうつすらと意識を取り戻して何かをしゃべろうとする。

しかし、言葉の変わりに吐き出されるのは真っ赤な血だった。

「喋らないで!今治療するからっ!」

膝を突きウルフの子を覗き込むようにしながら手をかざして、頭の中で治療する方法を思い描く。

しかし、そのどれもが前提として対象の体内のマナを必要とするものしかなく、今のウルフの子では耐えられない事がわかってしまう。

「これじゃだめ、これでも……何か助ける方法はっ!」

ふいに、頭の中にひとつの答えが過ぎった。

その答えに飛びつき、細かい事など気にも留めずにただ手順や方法だけを抽出して想起しはじめる。

「ハル、その方法は」

意図を察したシンクが春に声をかけるが、春は首を振り

「ううん。これしかない。僕なら平気だから」

と口早に答えてウルフの子に手を伸ばす。

「……言っても聞かぬのだろうな。……ならば、ひとまず場所を我が住処へ移そう。あそこには清浄なマナに溢れている。行使するならばこれ以上の場所はない」

そんな春の様子にシンクは首を振りながら諦めたように提案する。

シンクを通して、その心境や意図が春に伝わり、春の焦りが若干だ

が緩和して、決意の伴ったものへと変わる。

「わかった。……ごめんね、もうちょっとだけ待っててね？」

優しくあやす様に抱き上げる春の顔を、ウルフの子は力無く見上げ

「……ハル、兄ちゃん……お母さんは……？」

泣きそうな声で尋ねる。

その言葉に、春はぐつと言葉を飲み込むように押し黙り、ただ詠唱を口にする。

「……《流浪の軌跡、我が身を移す鏡を以って導け》 《ポイン  
トテレポーション》」

すうつと春の姿が薄くなり、その場から春の存在感が消えてゆく。

シンクもそれに倣って転移の魔法を行使し、姿が消える。

二人の消えた森の入り口には、ただ、大きな爪痕と、隕石が落ちた  
ような巨大なクレーターが残っていた。

ふわり。

と、まるで空間からにじみ出るように姿を現す春と、その腕に抱か  
れたウルフの子。

そして池の上の巨大な木の根の上に寝そべるような姿で現れたシン  
クの姿に、チエシヤ猫は驚いたように声を上げる。

「あらあらおかえりなさい　ってその子、どうしたんだい！それ  
より、その子の親は！？」

矢継ぎ早に尋ねるチエシヤ猫を制するように、春は静かに池のそば  
の地面にウルフの子を横たえる。

「今、助けるからね……」

柔らかく春が微笑みかけると、ウルフの子も小さく笑うように呻く。

「よく聴いて。君を助けるために、僕は君と契約したい。僕の名前  
は小柳春。君の名前を教えてください。」

ウルフの子の頭に手を置きながら、春はゆっくりと言葉を紡ぐ。

その言葉に、ウルフの子は一瞬何を言っているのかわからないと言  
う風な表情をしたが、すぐに小さく頷いて

「ハル……兄ちゃん、ボク……名前なんて、ないよ？」

苦しげに紡ぎだされるウルフの子の言葉に、春は考え込むように黙  
り込んだ後、優しく問いかけるように

「……それじゃあ、僕が君に名前を上げる。受け取ってくれる？」  
と囁く。

ウルフの子は小さく頷いて

「ハル兄ちゃんがくれるなら、ボク、受け取る」

と言って耳を小さく動かした。

「……じゃあ、君の名前は今日からウル、どうかな？」

頭をなでながら、春はウルフの子に名前を告げる。

名付けられた名を吟味するように目を閉じた後

「ウル……うん。ボクの名前は、ウル」

小さく笑いながらウルフの子、ウルは答えた。

瞬間、ウルと春の間に光が溢れる。

その光は赤と青。春の手からウルへと流れ込むように光が纏わりつ  
く。

「ん、うぐっ！」

光がウルへ流れ込み、その代わりに春にウル痛みと記憶が流れ込  
んでくる。

痛み手に手を離しそうになるのを必死に堪えながら、春はウル頭に  
手を置き続けた。

春の右手の甲に鋭く熱い痛みが走り、春は思わず目をつぶる。

力強い光に色彩が褪せて、広場が光に包まれてその場にいる誰もが  
目を瞑った。

やがてその光も収まって色が戻ってくる。

完全に光が消え、ウル姿が現れると、チエシャ猫だけにとどまら  
ず、春やシンクまでもが言葉を失ってウル姿を驚きの混ざった目  
で見ている。

「……ふえ？何？どうしたの？」

ウルだけが状況を飲み込めずに暢気な声を上げて起き上がる。

「あれ？ハル兄ちゃんってそんなに小さかったっけー？ねーねーぬ

しさまー。どうなってるのー？」

問いかけるウルに、シンクは静かに息を飲んで

「池を覗いてごらん」

とだけ言う。

言われたとおりにするウルの表情が驚きに塗り替えられてゆくのに  
そう時間はかからなかった。

池に映し出されたのは、先ほどまでの灰色の幼い毛並みが柔らかい、  
まだ成熟しきっていない小さな身体のウルフの子などではなく。

大きさだけでもウルフの倍ほどにも大きく、灰色の毛の一部が毛と  
同じ灰色の鱗状へと変化していた。さらに前足の肩部分から翼が生  
え、爪や牙が、まるでシンクのような黒々とした巨大なモノへと変貌  
していた。

「ええっ！？どうしたのこれ！ボク、大きくなっちゃった！すつご  
ーい！みてみて、ハル兄ちゃん！ボク、ぬしさまみたいな羽がつい  
てる！」

驚きとも喜びともつかないような表情で、ウルは大きく飛び上がっ  
て春に抱きつこうとする。

そんな巨大な身体で抱きつかれたのでは先ほどまでとは勝手が違う。  
押しつぶされまいとウルから飛びのこうと身を引く春の体が、ぐん  
と動いた。

本来の春はあまり運動神経がいいとは言えず、よくて人並みといっ  
た所だった。

しかし、まるで足に羽が生えたように俊敏に地を蹴り、あわや壁の  
役割をしている木の根にぶつかりかけた所で身を掠って壁に足をつ  
いて衝撃を殺し、地面へきれいな着地を決める。

「うわっ　　つてええっ!？」

自らが移動した距離に思わず春が声を上げた。

一回の跳躍で明らかに人間の駆動域を超えたような距離を軽々と飛  
び下がってしまった自分の足をまじまじと見つめている春に、シン  
クは小さく笑い

「契約の恩恵だ。契約者はお互いの力や知識が共有される。今のハルは、我がドラゴンの魔力と知恵、経験と知識を。さらにウルとウルとしての敏捷性を得たのだよ」と説明してくれる。

シンクの言葉に納得言った風に頷き、春は小さく呟いた。

「……なるほど。……でも、ウルはなんであんな姿に……」

「おそらく我との多重契約の弊害……恩恵とも呼べるのかも知れんが。契約の時に流れ込むマナのパイプが我とウルとで混線を起こし、その結果、契約の恩恵であるはずの特性の継承の一部がウルにも作用したのだろう」

頭を捻る春に、シンクが補足するように語ってくれる。

シンクの言葉に春は小さく首を捻る。

その情報が、いくら思い起こしても出てこないからだった。

そんな様子の春に苦笑しながら

「過去に一度も多重の契約を結ぶなどと言った規格外のことをやってのける者はおらんかったからな。あくまで推測だ」

と、シンクが付け加える。

「規格外って……」

反論しようとする春にシンクが先回りするように言葉を続ける。

「いくら潜在的なマナの保有量・保存量が多いと言っても、我と契約した上で他者との多重契約を結ぶなど、並みの者、いや、相当に才のある者でも身が持たん」

「……何とも、無いみたいですけど」

自分の身体を検める様に手や足を動かす春の目に、右手の甲に浮かぶ紋章が目に残る。

狼のような絵柄の、灰色の光を宿した痣の様な文様。ウルとの契約の証だった。

「ハルが例外的に規格外と言う事だ。しかし、それ以上の契約は身を滅ぼすぞ」

呆れる様に言うシンクに、春は笑って答える。

「あんな無茶はもうしないよ」

そんな春にウルが近づいてきて小さく鼻を鳴らす。

「ハル兄ちゃん……ありがとね。ボク、契約を通して全部わかったよ……お母さんが、死んじゃったことも……」

悲しいのを隠している事まで、春には手に取るようにわかった。ゆえに、かける言葉が見つからず、春は小さく息をのむ。

「ウル……」

何と声をかけようか、躊躇いがちに言いかける春を制するように

「でも、いいんだ！お母さんも、いつか必ず別れが来るって、それまでの間に、一人でも生きていけるように強くなりなさいって言うてたから」

ウルは力強く遠吠えする。

その声は幼いウルフの声でも、大人のウルフの声でもなく。どことなく、シンクを想起させるような力強い声だった。

「ボク、強くなったよ！それに、ハル兄ちゃんも一緒にいる……から」

言葉の途中、糸が切れたようにウルフの身体が傾ぎ、春に向かって倒れこむ。

倒れ行くウルフの身体から光が溢れ、その姿が変化する。

鱗に覆われた大きな身体が、元の柔らかな毛並みの小さな姿へと縮んでゆく。

春が慌てて受け止める頃にはすっかりと身体が元の子供のウルフの物へと戻っていた。

「え、これは……っ!？」

驚く春に、チエシヤ猫はウルを覗き込むように見ていたが

「なあに、心配要らないさ。おそらくは魔力の放出に疲れて寝てるだけさね。じきに眼が覚めるさ」

と、春たちが戻ってきて始めての笑顔を春に向けた。

チエシヤ猫の言葉を受けて、安心したようにウルを抱きながら

「よかった……」



と呟いて笑った。

「しかし、しばらくは安静にして変化した身体に順応する期間が必要だろう。なるべくマナの多いで休ませるに越した事は無いが、シンクが思案しながら呟く。

その言葉に、春は不意に思いついたように口を開いた。

「じゃあ、暫くは僕の世界　ルグラで休ませたらどうかな。僕がつれて帰って家においておけば良いし」

春の提案に一瞬驚いたような顔をしたシンクだったが、すぐに頷いて笑顔を見せる。

「それがよかるう。帰還の魔術の使い方はわかっておるうな？」

問いかけるシンクに、春は一瞬黙って記憶を探り、ある思い出を掘り起こす。

「大丈夫。前に、シンクが使ってくれたでしょう？」

と、春は悪戯っぽく笑って見せた。

春の言葉に意表を突かれたようにシンクが目を見開いて

「覚えておったか」

と感慨深く呟く。

そんなシンクに春は困ったように苦笑いを浮かべつつ

「覚えてたわけじゃないよ。ただ、さっき暴れた時にずっと思い出していたから……」

とだけ答える。

「そうか……」

「うん。今まで、忘れててごめん」

小さく謝罪する様に呟いた春に

「いや、随分と時が経っていたから、致し方ない」

とだけ答えて、シンクは緩やかな動作で木の根から降りてくる。

「……あの時から、僕達は友達だったんだね」

感慨深く、懐かしむように言った春に僅かに驚いたように

「まだ、友と呼んでくれるんだね」

今までとはまったく違う、柔らかく親しみのある砕けた口調で言っ

たシンクの姿が光に包まれ、その姿を変える。

龍鱗によつて覆われていた巨大な身体が、小さな、人間の子供のそれと変わらなくなる。

光が消えるて姿を現したシンクは、鱗の色を反映したような赤色のツンツンと跳ねた髪と、陶磁器のようにきめ細かな白い肌、金色の目が特徴的な美少年の姿になっていた。

予想はしていたが、やはり目の前で起きると驚きは大きく、春は言葉に詰まるようにぼつりぼつりと言葉を紡ぐ。

「……やっぱり。……そつちの姿のほうがいいよ。その外見って趣味？」

問いかける春に、シンクは軽く肩をすくめて目を伏せ

「マニトに換算した僕の年齢の姿が一番落ち着くんだよ」とだけ言つて春の前まで歩いてくる。

その姿は、フラッシュバックした光景の中にいた赤髪の少年とまったく変わらない。

重ねて言うならば、春が夢であつた少年そのものだった。

「……あの時と変わらないんだね」

「まあ、僕にとつての一歳は人間にとつての800年程度だからね。たかだか数年でそう変わる事も無い」

さらりと気の長くなるような話をしながらシンクが微笑むと、春もつられて苦笑してしまう。

そうだったのだ、こんな姿をしていても、シンクはドラゴン。長きを生き、あらゆるものを見てきた太古の龍。

しかし、それが人間に例えると、中学生、下手したら小学生にすら見える程に幼いと思うと、春は少しばかり愉快的気持ちだった。

ひとしきり笑い終える頃には、春の腕の中でウルが小さく呻いて目が開く。

「ん……あれ。ボク、どうしてたんだっけ……？」

目を覚ましたウルが寝ぼけたように言うのを聴いて、春は安心したように答える。

「疲れて眠っちゃってたんだよ。暫くはマナの多い場所で安静にしなきゃいけないから、僕と一緒に僕の世界に行こうって話をしたんだ」

春の言葉に、ウルは目を輝かせながら春の腕から飛び降りて春の前で尻尾を振り

「ハル兄ちゃんの世界！？少しだけ流れてきたけど、動く鉄の箱とか、石で出来た大きな建物がいっぱいあるんでしょ？行きたい行きたい！」

と、好奇心を前面に押し出したように目を輝かせるのだった。

「よかった。ウルの了承なしに連れて行くのもどうかと思ってたから。喜んでくれて嬉しいよ」

そう言つて笑いかける春の隣にシンクが立つと、初めて気づいたようにウルが首をかしげてシンクを見る。

「……あれ？そっちの人は誰？ぬしさまは？」

きよるきよると辺りを見回しながら問いかけるウルに、シンクはくすくすと笑いながら

「僕がそうだよ。マニトの姿に変身してるんだ」

と言つてウルの頭を撫でた。

ウルは頭におかれた手にふんふんと鼻を寄せて確かめるようにしながら

「ほんとだ！ぬしさまの匂いがする！」

といつて尻尾を振った。

「匂い……僕って臭う？」

ウルの何気ない一言にショックを受けたように、シンクは半歩身を引きながら、自身の匂いなどわかる筈も無いにもかかわらず、腕や手を鼻に近づけてくんくん匂いをかぎ始める。

そんなシンクに笑いながら

「大丈夫、臭くないよ」

といつて春が頭を撫でる。

「でも良いな」。ボクもハル兄ちゃんやぬしさまみたいになってみ

たいー。ねーねー。チェシヤお婆ちゃん。ボクにもできるかな？」  
尋ねるウルに、チェシヤ猫は困ったように答える。

「うーん。難しいだろうねえ。我が主の力が多少流れ込んではい  
ようだけど、変身は物凄く高度な魔術だから……」

「ええー！ずるーい！ぬしさま！ぬしさま！ボクにも教えてー！」  
シンクのそばへ駆け寄って、足元で尻尾を振るウルに対し、シンク  
は困り顔で春に助けを求め。

さすがにこれ以上放っておくのはかわいそうだと思った春はウルを  
抱き上げ

「ウルがもうちよつと大きくなったら教えてくれるよ。だから今は  
ゆっくり休んで元気にならなきゃね」  
と喋って抱きしめる。

抱きしめられたままのウルは小さく鼻を鳴らして

「……うん。わかったー。ぬしさま、ボクが大きくなったらちゃん  
と教えてくれる？」

と問いかけた。

「ああ。大きくなったらね」

シンクは小さく微笑みながら春に抱かれた状態のウルの頭を撫でる。

「じゃあ。ゲートを開くよ」

そう言って春が池の近くへ歩いて行き、その後ろをシンクとチェシ  
ヤ猫がついてゆく。

池の前で足を止めると春とシンク、そしてウルのマナにあてられた  
水面が風も無いのに微かに揺らぐ。

「これからは意識を傾ければいつでも会話が出る。何かあればま  
た声をかけるよ」

池の前に立つ春の後ろから、シンクが声をかける。

それに軽く頷き返してウルを下ろすと、池に向かって手をかざす。

「《隔たりし地への誘い、我呼びかけに答え、汝、道を示せ》」  
フェミユルシアへ来た時と同じ詠唱を、春は再び口にする。

しかし来た時とは違い、今の春にはその呪文の意味がハッキリと頭

に浮かんでいた。  
青い光が春の足元から池に溶け、水面に青色の幾何学模様が浮かび上がる。

まるで池そのものが光っているように粒があふれ、その光景に魅入られたようにウルが歓声を上げた。

「うわっ！すごいすごい！マナが溢れてる！綺麗ー！」  
そんなウルを促すように

「ゲートができた。さあ、行こっか」  
と言って、春が一步、池に向けて足を踏み入れる。

水に沈むかに思われた足が、透明な床が水面のすぐ上にあるかのようには押しとどめられ、春の体重を支えてもまるで微動だにせず、それどころか輝きを増したように文様が浮かぶ。

「わあー！ボクもーっ！」

その様子に、ウルも飛び込むような勢いで池に走りこむ。

ウルも身体も水に沈むことはなく、文様の上にふわりと足が着く。  
二人が乗った事で光が増し、その光が二人を中心に色彩を奪ってゆく。

「ハル……ありがとう」

呟くシンクの声が、春を振り向かせる。

「ううん。僕こそ、ありがとう」

春が笑いながら手を振り、シンクに言う。

その姿は徐々に霞んでゆき、ほどなくして、小柳春とウルの二人は、フェミユルシアから消えた。

〈始まりの声〉（後書き）

久しぶりに筆を執る時間ができたので、連載物を頑張ろうと思います。

この次は対の章、この章での主人公である小柳春と対を成すキャラクターの章を書くつもりです。

方向性の違う二人の異世界人。その二人がこれからどう絡み合い、もつれ合ってゆくのか。

これからの展開にご期待下さい。

……とまあ、こんな感じで、次の章でお会いできるのを楽しみにしております。

## 祈りの誓（前書き）

対の章の序章です。

この次の章はもう一人の主人公の視点で描かれる、もうひとつのフ  
ァンタジー！。

そう思って読んで頂けたらと思います。

## 祈りの書

〈対の序章〉

ファンタジーの世界。フェミュルシア。あらゆる命がマナによって生かされる、文明の一翼を魔法が担う世界。

大陸ないでも古くから存在する国のひとつ、リューデカリア王国の王都からそれほど離れていない森。

その森の奥にひっそりと隠されるように存在する廃墟とも遺跡ともつかない建物の中で、一人の女性が崩れた天井から差し込む日差しに、陶磁器のような透き通った白い肌が照らされ、せめてもの日よけにとすらりと細く、華奢な手をかざす。

腰まで伸びた緩やかなウェーブを描く明るい橙色の髪が太陽の光を受けてきらきらと輝き、女性の一拳手一投足に付き従うように揺れる髪の本一本が、まるで絹糸のように柔らかで繊細な印象を与える。

若葉の様に初々しい緑の瞳が日差しに細められ、建物全体を見渡すように動く。

まだ幼さの抜けきらない顔は誰もが見惚れるほどに均整の取れた目鼻立ちがくつきりと、それでいて目尻が微かに垂れている事で少女の持つ優しさを現した様な、美術品だといわれれば信じてしまいそうになるほどに美しい少女の目が床に刻まれた文様の様な柄に目を留める。

清楚に纏められてはいるものの、全体から気品や上品さのようなものがどこことなく滲み出し、その場にいる事そのものが不釣り合いな装いの女性は小さくため息をつき

「伝承が本当ならば……私の国を助けてくださるのでしょうか？」  
小鳥の囁きですらもその声を聞くために黙ってしまうのではないかと思えるほどに澄んだ少女の声が、静謐さを湛えた建物の中に小さ



く木霊する。

リユーデカリア王国現王女、シンシア「リユーデカリア」ルーシェは誰にとも無く呟いた。

本来ならば常に幾人かの護衛を引き連れて動く事になるはずだが、どういふ訳か、この場においてはシンシアの他に動くものはない。

差し込んだ光に照らされて、建物の表面を這う様に伸びる蔦や苔が青々と茂っているのが見て取れる。その建物が長い年月の間、人の目に触れていない事を物語っていた。

「どうか……私の国を、民を。お救い下さい」

ゆっくりと床の文様の前に膝を着き、決して安くない服が汚れてしまう事などまるで気にかけずに祈る様に目を伏せた。

シンシアの存在は、廃墟となった建物、差し込む光や、建物を覆う草木ですら、見るものに緻密に描かれた絵画のような印象を抱かせる幻想的な風景に変えてしまっている。

声の反響が消えてゆくと静寂が空気に染み渡り、この世界にはシンシアしか存在しないのではないかと思うほどの、暖かで、それでいて侘しい雰囲気漂った。

無言で祈りを捧げるシンシアの耳に、微かな物音が聞こえる。

本来ならば熟練の戦士にしか聞き取れないかもしれない程に僅かな音だったが、建物やその周囲の静けさがその物音の異質さを助長する形で、シンシアの耳に届く。

風もないのに、妙に草木がざわついていて、シンシアはふと入口に向けて視線を向けて立ち上がる。

音の主はまるでシンシアが気づいたのを分ったように徐々に音を隠すことをしなくなり、建物のすぐ外までやってきているようだった。まるで、建物の外と内で探り合うように、建物のすぐ外で音が止まった。

怪訝に眉を寄せ、閉じられた入口の扉の外に潜む者に対し、シンシアは声をかける。

「どちら様ですか？どうぞ、お入り下さい」

自分以外がこの場所にいる事に疑問を抱く事も無く、まるで客人を迎え入れるような柔らかな調子だった。

その声に反応したわけではないだろう。純粹な物音、声に対して、招かれざる客人が扉を乱暴に開けて飛び込んでくる。

建物内に5つの影が躍り出る。その姿は人間の子供ほどの大きさの猿よりはトカゲに近いような緑色の体表に覆われた魔物だった。

目は赤く血走り、獲物を探してぎよるぎよると建物の中を見回し、すぐにシンシアの姿を捉えて舌なめずりする。

「ま、魔物！？……ええつと、ゴブリン様……でしたかしら？」

突然の闖入者の姿は、シンシアがこれまで見てきたどんな姿よりも異質で、自身の知っている魔物の知識など、絵本で見たただの空想であった事を見せ付けた。

シンシアの声に応えるように魔物、ゴブリンが手に握っている短剣を握り直し、じりじりと距離をつめ始める。

その意図を察したシンシアは、小さく息を呑んで後ろへ一歩、また一歩と、ゴブリン達を刺激しないように下がると、それに合わせてゴブリン達が包囲するように迫る。

逃げ場を失い、醜悪な魔物達の生贄の儀式の様に床の模様の中心に追い詰められたシンシアは、ぎゅっと手を握って縋るようにつぶやいた。

「ああ、誰か、助けて」

## 祈りの誓（後書き）

よくいる清楚なお姫様。このピンチに主人公は間に合うのか。  
乞うご期待。です。

く助けを呼ぶ声く（前書き）

遅くなりました。漸く対の一章です。

今回の対の章は、前回の一章とはまた違った視点で描かれています。その為新しいキャラクターが多数登場し、前章とは打って変わった花賑わいとなっております。

〈助けを呼ぶ声〉

〈対の第一章・助けを呼ぶ声〉

黒く硬そうな髪が細く開いた窓から入ってくる春先の暖かな風に揺られて靡く。

机に教科書を立て、突っ伏した状態で心地よさ気に眠る少年の顔は、精悍というよりはやや幼い印象が残る。

「む……う……」

嫌な夢でも見ているのだろうか。眉根を寄せて呻く少年に、ひとつの影が静かに歩み寄っていた。

スパアン

綺麗な乾いた打撃音と共に、少年の頭に強い衝撃が走る。

「ぐえっ!?!……な、なんだ!どうした!?!」

突然の刺激に身体が過敏に反応し、席を立ち上がって周囲を見回す。すると、自身が学校の教室、しかも授業中に眠っていた事に思い至る。

恐る恐る視線をやや上に向けると、アスリートの様な屈強な肉体がスーツとミスマッチした、スポーツ刈りの髪型がさらに暑苦しさを助長する数学教師。

まさかの数学教師である。これが体育の教師と言われればすんなり納得もしようものだが、どうしたわけか、この教師は数学の教師として、少年達のクラスで教鞭をとっていた。

般若を思わせるような形相で少年を睨み

「どうしたもこうしたもねえよ馬鹿。遅刻してきて寝てやがるとはいい度胸じゃねえか」

ゴキゴキと肩を鳴らしながら少年に低く重い声の重圧をかける。

少年は叩かれた頭の痛みが抜けきらないのか、未だに頭を摩りながら反発するように

「だから、遅刻した理由はちゃんと説明しただろ!!!」  
と食って掛かる。

その言葉に、教師は腕を組み目を閉じる。

しかし、徐々にその眉間に皺が寄り、何かを噛み潰すような調子で  
「天城里桜……お前が本当に信号で立ち往生していたお婆さんを助  
けたり通勤途中のOLの落とし物探しをしたりするのは知ってるが、  
だからといって遅刻したり、ましてや授業中に寝ていい理由にはな  
らねえんだよ」

静かに言いつつ目を開ける教師の眼光の鋭さに気おされ、少年、里  
桜は半歩身を引いて

「……すみません」  
と小さく謝る。

そんな様子の里桜と教師、主に里桜に向けて

「あはは。里桜のばーか」

と隣の席からからかう様な、その場に不釣合いな明るい少女の声が  
割ってはいる。

その声の主は足を組みながら頬杖をつき、背中まで伸びた藍色の髪  
を弄る。

くりつとした赤茶色の瞳が悪戯っぽく笑い、その、年齢よりも数段  
幼く見える童顔がさらに幼い印象を与えていた。

そんな少女の様子に里桜はバンと机を叩いて、その場に教師が居る  
ことも完全に失念したように

「末明、お前、隣の席なんだから起こしてくれても良かっただろ！  
！」

怒鳴りながら少女、納雨末明いりさめ ほのかの座る机に大またで歩み寄る。

そんな里桜を受け流すような調子で肩をすくめ

「嫌よ。私まで怒られたくないしー」

と言いながら鼻を鳴らす。

「こ、この外道!!!」

間近で怒鳴る里桜に対し、耳を塞ぎながら末明が眉をしかめて立ち

上がる。

「こんな事くらいで外道呼ばわりしないでよ。人聞き悪い」

「うっせえ！人でなし！」

「うっさいわね！単純バカ！」

お互い、授業中であることも忘れて程度の低い罵り合いを始める里桜と末明。

そのすぐ脇で、教師のこめかみの血管が浮かび上がっていた。

「お前ら……仲がいいのは大変結構だが…… 授業中だと言ってるだろうが馬鹿共が！！！」

スパパアン

再び、打撃音が教室に響き渡る。

ほぼ同時に二人の頭を撃つ様な華麗な技に、里桜と末明は二人揃って叩かれた頭を押さえながら声をそろえて

「……いつてえ！！（いつたあい！！） 何するのよ！！（何すんだよ！！！！）」

見事なまでに声をシンク口させて教師に食って掛かった二人は、お互いの顔を見合わせて再度益体のない言い争いを始めた。

二人の様子を面白げに見守っていたクラスメイト達の笑い声が教室に広がる。

そんな二人に溜息を吐きながら

「授業に騒ぐ方が悪い。これ以上授業の妨げになるようならもう一発食らうか？」

威圧のこもった低く腹に響く様な声に、二人は身を引きながら声を詰まらせる。

「……うぐっ」

「や、やだなあ。せんせー。私は悪くないですよー。この馬鹿が悪いんです」

先ほどまで一緒になって罵り合っていたのをすっかり忘れたように、末明が里桜を指差して笑顔顔を貼り付けて猫撫で声で言う。

いきなり裏切られた里桜は一瞬絶句し、次の瞬間には末明への怒り

が再熱していた。

「……………てつめえ……………っ!!」

今にも食って掛かりそうな里桜の前に、教師がずいっと前へ出て、里桜の頭を二度ほど打ち据えた出席名簿をちらつかせながら

「まだやるか」

とだけ、睨みを利かせて言い放った。

その圧力に里桜は渋々と言った風に引き下がり、席に戻り際、末明に向けてキツとにらみつける。

そんな里桜に、末明は小さく舌を出して笑う。

「くっ……………」

席に戻った里桜は、完全にやり込められた敗北感を感じつつ、悔しげに窓の外に広がる校庭に目をそらす。

校庭に生い茂る草木が、風に揺られて微かに震えていた。

柔らかい日差しが教室に差込み、幾本もの光の筋が教室を照らしている。何のこともない、退屈な日常。

里桜は小さくため息をついて、先ほど怒られた事など既に忘れたように頬杖をつき、流れ込む風に身を委ねる様に緩やかに目蓋を閉じていった。

「里桜！里桜っ！！起きろっての！！！」

体を強く揺さぶられる感覚と、耳元で鳴り響く大音量。

その両方に無理やり覚醒させられた意識を引きずりながら、里桜は目を擦って幾度か瞬きを繰り返す。

「やっと起きた……………もう。あれだけ怒られたのによく眠れるわね……………」

覚醒したばかりの気だるい身体を動かさず、声の方へ視線を向ける。

見れば、呆れ顔で里桜を見下ろす末明の顔が、窓から差し込む、傾き掛けた橙色が映り込み、僅かにその頬を染めていた。



「ん……なんだよ末明、まだ眠いから寝かせてくれよ」  
覚醒しきらない意識のまま寝言のように囁く里桜に

「別に閉校時間まで寝てたいならご自由に。一応、幼馴染のよしみで声掛けてやったのに、少しは私に感謝しろっての」

末明は肩をすくめて自分の鞆を手に取りながら、教室に備え付けられている時計に目を向ける。

「閉校時間……？あれ……もうそんな時間？」

「馬鹿ねー。あれから放課後までずっと寝てたのよ？」

末明の言葉に、覚醒し始めた頭が漸く意味を理解し

「えっ……マジで!？」

盛大な音を立てて立ち上がる里桜に

「ほら、時計見なさいよ」

と喋って時計を示す。

時刻は既に夕方の18時をさしており、部活に勤しんでいた生徒も帰り支度を始めるような時間だった。

「……よし。帰ろう」

里桜はそう呟いて鞆を確認し、大して出してもいなかった教科書類を詰め込んでいそいそと帰り支度を始める。

そんな里桜の様子に、末明は呆れた様に

「あんだ、私を置いていく気？送っていきなさいよ。せっかく待ってて上げたんだから」

と、声を荒げて教室を出て行こうとする里桜の前へ立ちふさがる。

「なんだよ。起こしてくれた事は助かったけど、それだけだろ。家が近いからって何で俺が送らなきゃ」

里桜が脇を抜けて教室の外へでると、教室の中から末明の挑発するような声が聞こえてきた。

「あーあ。小柳先輩だったら優しく送ってくれたんだろうなあー」

里桜はガキだもんねー」

安い挑発だとは思ったが、結局は幼馴染の少女を置き去りに帰ってしまう事への気まずさに負け、教室に向かって怒鳴る。

「……………あーあー！！分かったよ分かりましたよ送って行けば良いんだろ!？」

里桜の行動など予想済みだと言わんばかりに、末明は教室から出てきながら

「最初からそう言えばいいのよ」

と言つてにやにやと含み笑いを浮かべる。

そんな様子の幼馴染に悔しさを噛み締めながら

「何だつて今日に限つて絡んで来るんだよ」

と嘯いて、里桜は廊下を歩く。

そのすぐ隣に追いついて末明は驚き交じりの声を上げる。

「何でもいいじゃない」

「また兄貴と喧嘩か？」

靴を履き替え、つま先でとんとんと地面を蹴りながら里桜が尋ねると

「うつさいわね。そんなじゃないわよ」

先に靴を履き終え、振り返りながら答えた末明の表情は逆光で差し込む夕日に隠れて見えない。

校舎の入り口で待つ末明の横に追いつき、通り過ぎ様里桜が小さく

「そうかよ」

とだけ言つて歩き始めた。

校庭を抜け、茜色に染まった路地を歩く。

夕日に照らされた通学路は、朝とはまた違った場所のような印象を与えていた。

人通りの疎らになつた道は静かで、無言で歩く二人の間の静けさを助長するようだった。

無言で前を歩く里桜の背中に向かって

「……………里桜のバカ」

末明は里桜の耳に入らないような小さな声で呟いた。

「何か言つたか？」

「なんでもないわよ。何でも」

振り返る里桜を早足で追い抜き、一步先に出て取り繕つように言っ

て髪を振って前を歩く末明。

「ならいいんだけどよ」

その後ろを頭を掻きながら里桜は嘯く。

「……」

里桜の知る末明は、要領がよく、悩みなど抱え込むようには見えな  
い普通の女の子だ。

小学校に入るよりも前から家が近い事もあり、高校に入った今でも  
何かにつけてはペアを組まされ一緒になる事が多い、自他共に認め  
る腐れ縁というやつだった。

学校を出て歩いている間中、ずっと感じている違和感。

形にならない不安感のような物に後押しされる形で

「何かあったら、ちゃんと見えよ」

黙ったまま前を歩く末明に、里桜が声をかける。

その言葉を飲み込むように足を止め僅かに俯きながら

「……うん」

と答えた末明は、微かに安堵したような表情を浮かべていた。

その表情がどこか儂げで、里桜の心に募る不安感が一層増したよう  
に感じ、それ以上の言葉を紡げなかった。

朱から暗へと徐々に変わりゆく通学路を、ただ無言で、お互いの歩  
調に合わせるでもなく歩く。

店やビルが減ってゆき、立ち並ぶ建物の種類は住宅に変わりだす。

昼間の騒々しさが嘘のように黙り込んだ末明の背中を見ながら、普  
段はどうだっただろうと里桜は思考をめぐらせる。

里桜自身は元々饒舌な方ではないが、普段は末明が一方的に話しか  
けてくる為、それに相槌を打つだけでそれなりに会話が成立してい  
た。

その末明が一言も口を聞かずに歩く様子は、強い違和感となって、

里桜の胸に無形の重圧を与えていた。

「ん。ここまででいいよ」

道をはさんだ向かい側にある家の門の前。すっきり暗くなつた路地で、末明が言う。

漸く口を開いた末明に、里桜は僅かに安堵を抱きながら苦笑する。

「ばーか。ここまでで良いって。俺とお前の家、向かい側だろうが」  
言われて初めて気づいたかのように、末明も苦笑に釣られて笑い

「……あ。そ、そうだね」

妙に歯切れの悪い相槌で応え、家の門を開けて中に入っていくとする。

その後姿が、いつにもまして小さく見えた気がして、里桜は自分でも気づかぬうちに声をかけていた。

「本当に大丈夫かよ」

「だ、大丈夫よ！全く、今日の里桜、ちょっと変だよ？」

振り返らずに応えた末明の声は妙に明るく、何かを隠している様だった。

だが、隠している事が何なのか、里桜にはわからない。

「お前が変だからだろ」

そう囁く里桜の耳に、末明のつぶやく声が聞こえる。

「……本当に、勘良過ぎ」

俯き、背を向けたままの末明の小さな声。

しかし、それは里桜の抱いていた漠然とした違和感を確信に変えるのに十分な言葉だった。

「なあ」

訊ねようとした里桜の意図を察した様に、末明は乱暴に門を閉めて

「じゃあ、また明日ね！」

と言って家の中へと入って行ってしまふ。

「おい！末明！！」

呼びかける里桜の声が、日が沈み、街灯の僅かな明りに照らされた住宅街に木霊して消える。

「……つたく。何なんだよ。言わなきゃ分かんねえだろうが」  
一人残された里桜は苦虫を噛み潰すような、困惑とも怒りともつかないやり場を失くした感情を吐き出すように呟く。

「それとも、俺じゃ話にならないってのかよ」  
奥歯を噛み締め、拳を握りこむ。

夜の、まだ軽く肌寒い春の風が里桜の髪を弄ぶ様に静かに流れる。

「……はあ。明日まだあいつの様子がおかしかったら考えるか」  
ため息をつき、末明の家とは向かい側の自宅の門を開けながら里桜が呟く。

門を閉めようとした時、体を何かが貫くような、熱い、痛みのような物が里桜の胸に刺さった。

「ぐっ!?!?……何、が」

突然の痛みで膝をつき、里桜の肺の酸素が無理やり吐き出された。呼吸を整えようと無意識に呼吸が制限され、息苦しさを視界が明滅する。

「く……あ……」

無理にでも呼吸をしようと、息を吸う。

すると嘘の様に苦しさが消えて、先ほどまでの痛みが幻覚だったのではないかと思える程だった。

額に玉の様に浮かんだ汗が、痛みが本物だったことを里桜に実感させる。

ビキッ

明滅から戻ってきた視界が揺れて、暗くなった住宅街が一瞬、草木の生い茂る、人の手が触れなくなって久しい様な森の景色が重なる。見覚えのない景色の中で、人影が囁く。

「……助けて」

まるで耳元で言われたかのような鮮明な音声に、里桜はハッとなって立ち上がる。

既に痛みの跡さえない身体はすぐに動き、ガシャンと門を揺らして音を立てた。

幻聴のように頭の中で鳴り響く声が、言葉を紡ぐ。

「……私の国を、民を……お救いください」

か細く華奢な印象を与える姿無き声に、里桜が問いかける。

「誰だ、何処にいる？」

少女然とした声の主は応えない。

里桜が耳を澄まし辺りを見回すと、再び景色が揺れて、森の更に奥に、自然に埋没された古い建物が映り込む。

「何だよ……この景色」

呟く里桜の頭に直接語り掛けるような声が、再び響く。

「 助けて」

その声はまるで、古い建物 教科書に載っていた教会や神殿の様な物にも見えるその中から発せられているように感じた。

「……待つてる。今、助けるから」

声の主に返すように呟く里桜は、ふらふらと覚束無い足取りで門を出て、森の奥の建物を目指す。

幻覚のように見えていた景色が強く鮮明になり、既に里桜の視界には住宅街も、街灯も見えていなかった。

ただ、声の主を探すように、里桜は森を歩く。

その足は住宅街を過ぎ、ビルの隙間を縫うように、ふらふらとしてはいるものの危なげの無い、まるで目的地が明確に分かっている者のような歩みだった。

「……どこだ、あんたは、何処にいる……？」

声の主を見失わないように、里桜は再び呟くように訊ねる。

「 助けてください」

応えるように里桜の頭に響く声が、先ほどよりも近くに感じた。その言葉に里桜は小さく笑って

「心配すんな、すぐに、駆けつけてやるからさ」

ビルの外壁を支えに神殿を目指しながら言う。

不意に、建物の中の細い道が開け、広い空間に出る。

街灯すらない暗い空間。その奥の地面が淡く輝いていた。

景色の割合が、急に現実実を帯びた物へと変わる。

「あれ。何処だこ」……」

現実に戻され、我に戻った里桜が呟くと、それに呼応するように声が頭に響く。

「どうか……私の国を、民を。お救い下さい」

今までで一番強く、鮮明に聞こえる声。

その声は、淡く青い光を放つ場所から聞こえてくるようだった。

「あんたが、俺を呼んだのか？」

訊ねながら里桜が光に寄ってゆくと、それがただの模様ではない事に気づく。

ただ床に描かれているのではなく、光で作られた何かの模様が地面からほんの数センチほど浮かんでいた。

不思議な光景に思わず見惚れ、光に手を伸ばし掛けた里桜の耳に、先ほどまでの囁く、祈りの様な声とは違った声が響く。

「っ！どなたですか！？」

今まで意志の疎通らしきものが取れなかった相手のきちんとした反応に、思わず立ち上がって里桜が叫び返す。

「あんたは何者だ！？何処にいるんだ！！」

「私は きゃあっ！」

里桜の言葉に答えようとした少女の言葉が途切れ、悲鳴に変わる。

光の向こうから聞こえる悲鳴に、里桜は狼狽して姿無き声の主に向かって叫ぶ。

「おい、どうした！！大丈夫か！？」

「どなたか存じませんが、どうか、私の事をお助け下さい」

少女の逼迫した声。

里桜はまともに会話をするだけの余裕が無い事を、少女の震える声から悟る。

ぐっと拳を握り締め、喉が鳴った。

空に浮かぶ月が妙に明るく、空間を照らす。見上げれば星が瞬く夜空が広がっており、夜の風が足早に雲をさらって行く。

視線を足元へ移し、もう一度光で出来た模様を見据えると、光の渦が陣の内側へと巻き込むように流れ、淡い光が中心で収束して夜空の星を映し込む様に輝いている。

光の中へ一歩踏み出す里桜の瞳の奥には、内に秘めた意思が反映されるかのごとく、強い光が宿っていた。

「……そんな事言われたら……助けないわけにはいかないだろっ……！」

少女の声に答え、光の渦へ一歩踏み出した里桜の髪が、光の奔流に弄ばれて揺れる。

里桜が中心に立つと、光はその力強さを増して色が青から白へと変わってゆき、里桜の視界を、世界を、飲み込んでゆく。

「ぐっ……何、だっ!?!」

景色が完全に溶けて、光の流れに投げ出される感覚。

「う、わああああああっ!!!」

暖かな渦に飲み込まれて、柔らかな渦の中を落下してゆく。

視界の端で何かが通り過ぎるのを境に、里桜の意識は光に吞まれる様に霞んで行った。

「大丈夫ですか!?!しっかり、しっかりしてください!!!」

精一杯声を張り上げるような、切羽詰った少女の声に揺られ、里桜は瞼を開ける。

建物の崩れた場所から柔らかな日差しが降り注ぎ、まだ日が高いことが見て取れた。

いつの間に寝てしまったのだろうかとうと首をかしげて声のほうを見ると、見慣れない少女が心配そうに里桜を覗き込んでいる所だった。

「……あれ?俺、どうして」

チャリ、チャリ……

少女に尋ねようとした里桜の耳に、聞きなれない音が割り込んでき



て、里桜の言葉を押しとどめる。

それはまるで、金属同士が打ち合わさるような音。

「おそらく狙いは私です。早く、お逃げ下さい」

少女の声にハツとなって周りを見回せば、見た事も無い小人のような頭身の、緑色の鱗の様な体表に覆われた者たちが一様に短剣の様な物を構えて里桜と少女を包囲していた。

小人　ゴブリン達は突然の闖入者に対して、どう対処したらいいのか分からず、様子を見るように里桜と少女を見比べる。

「な　んだよ、これっ！！」

叫びながら立ち上がると、少女はビクツと肩を震わせて里桜から手を引く。

突然声を張り上げた里桜に、ゴブリン達は驚くように半歩身を引きながら武器を里桜に合わせて構えなおす。

「あの、私が隙を作ります。ですから」

立ち上がりながら、震える手を押さえつけるように握り締めた少女が里桜に声を掛ける。

その姿は、朽ち果てた遺跡とも言える様なこの場において、ひどく不釣合いな程に清廉で、清楚かつ上品な雰囲気醸し出していた。

とても武器を構えられ、狙われる様には見えない少女が、里桜を逃がすために勇気を振り絞って立つ。

それだけで、里桜の頭の中には向けられている刃物の恐怖よりも、この不思議な空間、見知らぬ場所への疑問よりも、少女を助けたいと言う思考が膨れ上がり、爆発する。

「ここが何処だとか、あんたが誰だとか、そんなのは関係ねえ。…

…助けを呼んだのはあんただよな？」

自身の中にふつつつと湧き上がる、怒りにも似た力強い感触を手先に感じながら、里桜は目の前の存在から少女を護る様に前へ出つつ問いかける。

少女は、不意に問いかけられた言葉に驚きとも安堵とも付かない調子で

「え？あ、はい……確かに、先ほどから声が聞こえて、私が助けて下さいと。言いましたけれど……」  
と答えるのだった。

里桜はその答えを聞いて確信する。

自分がここにいる理由を。この少女こそが、自身に助けを求めた存在なのだ。

そこまで分かれば、里桜にとっては十分だった。

「あの……失礼ですが、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

後ろから遠慮がちに問いかける少女の声に、里桜は振り返らずに  
「そういえば、俺もあんたの名前、聞いてなかったな。まあ、こんな時にのんきに自己紹介つてもどうかと思うけどな」  
とだけ言つて、安心させるように小さく笑う。

里桜に言われて初めて自分が名乗っていない事に気づいた少女は手で口元を押さえて

「ご、ごめんなさい。私ったら自分の名前も告げずにお名前をお聞きするなんて……私はシンシア、シンシア＝リユーデカリア＝ル＝シエですわ」

慌てたように名乗る少女　シンシアの様子に、里桜とシンシアの間だけ緊迫した空気が僅かに緩む。

気を抜ける状況ではないにも関わらず、里桜は思わずシンシアの言葉に振り返り

「自己紹介は後でもできるだろ。まあ、生きて出られたらだけだな

……俺は里桜だ。天城里桜、よろしくな」

苦笑交じりに自己紹介に返してしまう。

「リオン様……はい。がんばって、無事にこの場所を出しましょうね！」

笑われた事などまるで気にした風も無く、シンシアが里桜に向かって無垢な笑顔を向ける。

「リオンって……まあ、別にいいけどさ」

名前の間違いなど訂正するだけ無駄だと、目の前の危機に頭を無理やり引き戻して里桜……リオンが呟く。

まるでそれに合わせた様に、ゴブリン達がリオンとシンシアを威嚇するように声を上げる。

「ゴガツ！ギョギョルル！！」

その声は動物の様でもあったが、リオンの知る動物の声とは明らかに違った物だった。

咄嗟にシンシアを守るように立ったりリオンの腕に、シンシアがしがみ付く。

「きゃあつ！！」

刹那、シンシアとリオンの触れ合っていた部分が力強く光り、輝きを増して二人を包み込んでゆく。

「今度は何だ！？」

「リオン様、これは一体……」

光に吞まれながら、二人はお互いの知らない記憶が、知識が、想いが混ざり合うのを感じた。

やがて光はシンシアがしがみ付いていたリオンの右腕に収束し、一瞬、焼けるような痛みを伴って完全に消える。

リオンは収束した光が、剣と旗が王冠が絡み合った様な文様に変わるのを見た。

そしてそれが自身の腕に絡みつき、証として焼け付くのを感じた。

「な、んだ……さっきのは」

「古の伝説、本当だったのですね。リオン様が、かの地より誘われし、勇者様……」

紋章を撫でながら呟くリオンの、シンシアは応えず、夢でも見ているような調子で呟くのみだった。

聞きたいことは山ほどあった。しかし、それを許すほど、ゴブリン達も待つてはくれない。

「……って、気にしてる暇なんかねえよな！」

短剣を振り下ろそうと飛び掛ってくる正面のゴブリンを、反射的に

蹴り飛ばしながらリオンは叫ぶ。

考えるより先に身体が動き、横合いから隙をうかがっていたゴブリンの様な敵に肉迫する。

普段よりも身体が軽く、まるで羽でも生えたかのように一瞬でゴブリンの眼前まで踏み込んだりリオンは叫びながら

「お前らが、この子を傷つけるって言うなら、俺はこの子を護ってみせる！！！」

走りこんだ勢いをそのままに、握りこんだ拳を振りぬいて、予想以上の速さに対応できなかったのか、まともに受身を取ることもなく、ゴブリンは短剣を手放して壁まで吹き飛んでゆく。

持ち主を失い、宙をくるくると弧を描いて落ちてくる短剣を、まるで出来て当たり前の様に易々と掴んだ右手は紋章と同じく白い光をまとっており、それは手を通して短剣を包み込む。

「何がなんだかわからねえけど。とりあえずこの力があればシンシアを護れるんだよな」

短剣を強く握りこむと、光はまるで意思を反映するかのようになり、薄く、鋭く研ぎ澄まされた。

その光が短剣の本来の刀身を超え、一般的な長剣の長さにも達する。

「これなら」

光の長剣をしっかりと握り、リオンが離れた隙を突いて切りかかるように飛び掛る。

「させるかよっ！！！」

光が一閃し、本来のリーチをはるかに超えてゴブリンを襲う。

まるで名匠が打った剣の様に、光が描いた軌跡通りに、ゴブリンの身体を斜めに薄い線が奔る。

一瞬遅れて線からあふれ出すように赤紫色の液体が噴出してリオンの服を濡らし、頬に返り血が飛ぶ。

「おっせえっ！！！」

片足を軸に、無理やりに軌道を変えながら、別のゴブリンを逆袈裟

に斬り上げ、振り向き様にもう一匹のゴブリンを斬りつける。  
一瞬にしてシンシアを囲んでいたゴブリン達が、1匹を残して壊滅した。

シンシアは自身を救ってくれた突然の救世主に言葉を失い、ただその場に立ち尽くし、ゴブリンもまた、突然現れた敵に壊滅された動揺からか、その場に足を縫いとめられたかのように動けずにいる。先ほどの俊敏さとは打って変わった緩やかな動きでリオンはシンシアとゴブリンの間に割って立つ。

返り血にぬれた光の刃を振り、飛び散った血が床に小さな染みを作る。

頬に付いた血を左の袖で拭いながら、残った最後のゴブリンを睨み付け

「まだやるか？……って言っても、言葉が通じるかわからねえけどな」

と言って剣の先を突きつけるように向ける。

言葉が通じたと言うよりは、リオンの発する雰囲気飲まれたという方が正しいのかもしれない。

どちらにしろ、ゴブリンは一步、また一步と、じりじりと足を建物の唯一の出入り口の方へと向けていた。

その様子に、リオンが武器を下ろしてもう行けと手を振る。

ゴブリンは今度こそ意図を察したように大慌てで踵を返して出口へと走り出した。

その後姿を視界の端に納め、リオンはシンシアに向き直る。

「大丈夫だったか？どこか、怪我とかしてないか？」

問いかけるリオンに、シンシアは漸く、自身が救われたのだと理解し、張り詰めた糸が切れたように床に座り込んでしまう。

「あ、おいつ！！大丈夫か！？」

慌てて駆け寄るリオンに、シンシアは困ったように笑い

「いいえ、違うんです。ただ、安心したら腰が抜けてしまって……立ち上がるの、手伝ってもらえませんか？」

と、リオンに向かって手を出す。

その手をとろうとして短剣を左手に持ち替えた時、リオンは自身の手が返り血にぬれていることに気づき、手を取ろうか躊躇する。

迷ったまま手を引つ込めずにいると、シンシアは無理やり手を伸ばしてリオンの手を握った。

「あ、おい。汚れてもいいのかよ」

握った手の柔らかさと、人肌のぬくもりを感じながら、リオンは困ったようにシンシアを見る。

「はい。もう汚れてしまっていますし。……それに、命がけで私を護って下さったんですもの。汚いはずがありませんわ」

そう言いながら微笑みかけるシンシアの服は、みれば所々が破け、その上品な装いが台無しとまではいかない物の、大よそこれからも着続けることは無いだろう事を容易に想像させた。

「まあ、あんたが良いなら……それでいいけどさ」

短剣を持ったままの左手で困ったように頬を掻きながら、ぐっと力をこめてシンシアを立ち上がらせる。

思いのほかシンシアが軽かったことと、先ほども感じていた、いつもとは違う力加減。

その二つが重なって、シンシアの身体は勢い余ってリオンの胸に飛び込んでしまう。

「きゃあっ!!」

「うおっと……」

受け止めたリオンと、シンシアの顔が近い。

間近で目があった瞬間、シンシアの長い睫や、新緑の瞳の奥の済んだ光に、リオンは思わず動きを止めてしまう。

「あ、あの……リオン、様……?」

恥じ入る様に頬を薄紅色に染めて見上げてくるシンシアに、リオンはハッと我に返って手を離す。

「あ、わ、悪い!!!強く引つ張りすぎた」

頬を赤らめながらそっぽを向くリオンに

「いえ……」

シンシアも頬を赤らめたまま視線を足元へ向けて眩く。

先ほどとは違う、妙な緊張感が漂った沈黙。

お互い、どう声をかけて良いのか分からずに、お互いとは違う場所へ視線を彷徨わせる。

「あの……」

沈黙に耐えかねたようにシンシアが口を開く。

その言葉に反応するように、リオンもまた、シンシアへ顔を向ける。

「助けてくださって、ありがとうございます」

はにかみながらそういったシンシアに、リオンもまた答えようとした瞬間。

ドガアン

建物の外で、何かが激しく地面に叩き付けられるような音が響き、地響きが建物の中にいたシンシア達にも伝わった。

「何……でしよう？」

小さく問いかけるシンシアに、リオンは横に首を振り

「分からねえ。けど、あんたは外に出るべきじゃない。俺が見てく

るから、ここで待ってる」

そう言っ外へ出て行こうとする。

シンシアはそんなリオンの背中に

「あの、ちゃんと待っていたら……私のこと、ちゃんと名前でよんで下さいますか？」

と言っ、小さく俯く。

そんなシンシアにリオンは振り返って苦笑しながら

「分かったよ。ちゃんと戻ってくるから。その時は名前で呼ぶさ」と言っ外へ踏み出していった。

リオンが注意深く外へ出ると、音の発生源はすぐにわかった。

木々の間でさえ隠れきらない見上げるほどに大きな浅黒い身体、その太く逞しい手に握られた棍棒が赤紫色に湿っていた。

その足元に、先ほど逃げたゴブリンだと思われる亡骸が、見るも無残に潰されて陥没した地面の中央に、まるでカエルのように張り付いているのが遠目から見て取れる。

「何だよ……あいつ」

リオンは呟きながら、気取られないように木の陰に隠れて様子を伺う。

その姿はまるで、ゲームに登場する巨人、トロールという名前のモンスターそのものだった。

「あいつが、ボスなのか……」

左手に持ったままだった短剣を右手に持ち直し、柄を握り締める。

先ほどのゴブリンなど、まるで比べ物にならないだろう事は容易に想像できた。

トロールは迷い無く廃墟の方へ、シンシアの隠れている建物の方へ向かってくる。

「……やるしか、なさそうだな」

強く握った短剣に再び光が纏わり、その姿を白い光の刃を持った長剣へと変える。

いつ飛び出そうか迷っていると、不意にトロールが口を開く。

「そこに隠れているんだろう。出て来い。出てこなければその木ごと貴様を叩き潰すぞ」

がらがらと皺枯れた、耳障りな低音が、確かにそう言葉を発した。重々しい足音が、徐々にリオンの隠れる木へと迫ってくる。

このままいけばトロールは宣言通りに木をなぎ倒し、隠れたままのリオンごと押しつぶすだろう。

意を決して飛び出し、光の剣を片手で構え、トロールと一定の距離を取って様子を伺い

「あんたが、あのちっこい奴らのボスか？」

通じるかどうかはわからなかったが、リオンの耳にもわかる言語で



警告してきたトロールになら通じるかもしれないという期待をこめて訊ねる。

すると、トロールは顔を歪ませ

「どうやら本当に全滅したらしいな」

冷やかに笑う。

笑い声が聞こえた事で、リオンはようやく、トロールの表情が歪んでいるのではなく、笑っているのだとわかる。

「仲間がやられて、笑うのか」

問い掛けるリオンの声に、微かに怒気が含まれる。

トロールはそんな様子など歯牙にもかけず、口が裂けるのではないかと思うほどに開き

「たかがマニトの一匹が、二匹に増えた程度で逃げ出すような小物を、仲間と呼ぶのか？」

まるで挑発するように、かつての部下だったであろうゴブリンたちを嘲弄するトロールの言葉に、リオンの中で何かがカチリと音を立てた。

「……てめえみたいなのが一番ムカつくんだよっ！！！」

すでにこれ以上語らう事はないと断じたりオンが駆ける。

ほんの数歩の踏み込みで、トロールの眼前に肉迫し、光の刃が軌跡を描く。

ガギイイン……ッ！！！！

軌跡が歪み、棍棒と噛み合って止まる。

「ぐっ……！！！」

光の刃が、棍棒との鏝迫り合いで光の粒子を散らす。

全力で踏み込んだにもかかわらず、トロールの構えた棍棒をそれ以上動かす事ができない。

「どうした、それで終わりか」

嘲る様な調子でトロールがリオンを見下ろしながら言った。

奥歯をかみ締め、リオンは棍棒を押し切ろうとさらに足に、腕に力をこめる。

ふと、トロールの方が僅かに身を引くように棍棒をいなした。

お互いの力が正面からぶつかっていた事で拮抗していたバランスが崩れ、ぐらりとリオンの体勢が揺れる。

「ふん。くだらんな」

呟き、嘲る様なトロールの声が聞こえた瞬間、リオンは体制を整える事も考えずにただ横へと無様に転げた。

ドガン！

続いて耳元で響いた地響きと、顔にかかる土砂を強引に振り払いながら、立ち上がるよりも先に地面を強く蹴ってトロールから大きく距離をとる。

転がりながら立ち上がったリオンが見たものは、舞い上がる土の飛沫。えぐれた地面。

そして、悠然と棍棒を構えなおして逃げ回る獲物を舌なめずりして見下すトロールだった。

「それで、許さんというならば一太刀くらい入れてみたらどうだ」挑発するようなトロールの声。

しかし、目の前の光景に、リオンの思考は過熱されつつも平静を保っていた。

「焦んなよ、すぐにてめえにキツいお灸をぶちこんでやるからさ」リオンは特に武術を習った覚えはない。ただ、喧嘩をある程度の数こなしていて、修羅場になれている。

それだけだった。

しかし、それだけでも、トロールを今の自分が正面から相手取るには、圧倒的に力不足だとわかる。

もしも一太刀入れることができるとするならば、トロールが予想もしない不意の一撃。

もしくはフェイントを織り交ぜ、相手の体格を逆手に取って翻弄し、相手が疲弊して手が緩むまで攻め続ける持久戦。

相手に攻めの手を渡せば、それだけ死が近づく。

命の危険を目の当たりにして、それでも逃げ出さなかっただけ誇れ

ることだろう。

首筋を伝う嫌な汗を強引に拭って、トロールの僅かな動きも逃さないように目を凝らす。

緩慢な動きでリオンを叩き潰すために歩み来るトロールに、その死を携えてやって来る地響きに、リオンは生唾を飲み込んで光の刃を構えた。

逃げろ、逃げていいんだ。どうしてこんな訳のわからない所で命を張る必要がある。

頭の中に響く警鐘が、地響きと共にガンガンとリオンの頭を打つ。

天使の囁きとも、悪魔の誘いともつかないその警鐘を、リオンは大きく頭を振って否定する。

「逃げて、たまるか……っ!!」

そう呟くりオンの脳裏には、ただ一つの絶対的な、揺ぎ無い事象が焼き付いていた。

シンシアを助けに来たつもりだった。

しかし、シンシアは救ってほしかったにもかかわらず、リオンの、あまりにも無防備な格好を見て、自ら盾となろうとした。

怖かっただろう。必死に、来るかもわからない、姿も見えない相手に対して祈ってしまうほどに。

漸く来た助けに失望しただろう。自分と年端も変わらない、おまけに意識が混濁して状況の飲み込めていない無防備な少年に。

それでも、シンシアは前へたつたのだ。自分が圧倒的に非力で、凶刃の前に晒されればその細く華奢な体などひとたまりも無い事など判り切っていた筈なのに。

その光景が嫌でも目に焼きついて、それだけが、リオンが引くわけにはいかない絶対の理由になっていた。

自分が逃げれば、シンシアが死ぬ。

この訳のわからない世界に飛び込んだのは自分で、希望を持たせたのも、失望させたのも自分だ。

ならばせめて、シンシアが安全になるまでは守らなければ。

グツと足に力を込め、目の前に迫ったトロールが棍棒を振り上げる動作にあわせて横に飛ぶ。

そのまま相手の後ろに回り込むように走り、それを追うようにトロールが横振りに棍棒を薙ぐ。

トロールは完全に、リオンを捉えたと思っていた。

横を抜けて後ろに回りこんだ相手がすることなどひとつ。

そう高を括っていたのだ。

しかし、振り向きざまに薙いだ棍棒の先にリオンはいない。手に伝わるのは、空気を薙いだ虚無感だけだった。

リオンの姿を探して視線をめぐらせるトロールの視界、そのやや上方で光が煌いたのをトロールは認識する。

「そ、こだああああっ!!!」

聳え立つ樹の上。トロールの後ろへ回り込んだリオンは、そのままトロールに突撃するのではなく、さらにその後ろの生い茂る木々の上へ駆け上がっていた。

トロールよりも高い位置の枝を足場に、リオンは飛び降りざまに力強く樹の幹を蹴って飛び込む様にトロールへ迫る。

上空から一本の槍のように、トロールへ光の刃が奔る。

大きく振りぬいた棍棒を無理やり引き戻し、リオンの刃が届くよりも一瞬早く、狙い来る刃に合わせるように構えた。

トロールとリオンの視線がぶつかり、光の刃が棍棒を打ち据える。

再びぶつかり合う音が響いて、棍棒と刃の間に光の粒が舞って、棍棒の表面に細い裂傷が刻まれた。

しかし、その先のトロールに刃が届くことはない。

空中で止まったりリオンに、トロールは棍棒越しににやりと笑った。

このまま落ちてくるリオンを狙って振りぬく。それだけで勝負がつくと、今度こそトロールは自身の勝利を確信していた。

「まだ……まだだっ!!!」

リオンが奥歯を食いしばり、ぶつかり合う棍棒と光の刃を軸に体を翻し、トロールの頭を飛び越える。

トロールの後ろへ着地したりオンが、振り返り様にさらに飛び込む。  
光の軌跡が、トロールの背中を切りつけた。

「……………ぐっ！う……………」  
薄く裂いた光の軌道が、浅黒い巨体に線を残す。  
しかし、斬り付けるより一瞬早く反応したトロールに致命傷を与えるには至らない。

リオンは再びトロールから距離をとりながら内心で齒噛みしていた。  
絶好のチャンス逃した。この先、こういった不意打ちはもう通じないだろう。

それは、数少ない勝利への道筋が閉ざされたことを意味していた。  
トロールはもう油断しない。おそらくは一太刀を浴びせてきたリオンを敵と見做し、全力で叩き潰しに来るだろう。

呻くトロールの背中傷から、地面にぼたぼたと、腰に巻かれた布を伝って赤紫の液体が流れ落ちて染みになる。

「一太刀。だ」  
内心の焦りなど微塵も見せないつもりで、リオンは光の剣についた血を振り払いながら刃の先をトロールに突きつける様に向ける。

「たかがマントが……………」  
憎憎しげに呟きながらリオンを睨むトロールの視線と、剣の光に似た鋭く、強い意志を秘めたリオンの瞳がぶつかり合った。

「もう油断などない。貴様は念を入れて殺すでしょう」

トロールの口から吐き出されるのは、呪いの様な重い響きの声。

「やれるもんならやってみるよっ！！」

トロールの声に応じるように身を屈ませ、握り締めた短剣を構えながらリオンが叫び、再びトロールへと駆けた。

自身に一撃を当てたりオンを、敵と認識したトロールもまた、さきほどまでの隙だらけの構えではない、相手に全身の注意を傾けた状態で迎え撃つ。

リオンの剣戟が、トロールの棍棒が、枝を切り、地面をえぐる。  
二つの影が幾度と無くぶつかりあっては離れてを繰り返し、周囲に

傷を刻んでいった。

廃墟と化した神殿の様な建物の中。

土や草の匂いに混じって、鉄臭い臭いが鼻につく、柔らかな日差しだけが平和そうに降り注ぐ屋内。

所々に赤紫色の血だまりと、先ほどリオンに切り伏せられたゴブリンの亡骸が無造作に転がっていた。

細部まで意匠が凝らされた白地に金の刺繍がされたドレスの様な服に血がつくことも厭わず、シンシアはゴ布林達を抱き起こし、一列に並べて弔う様にひざを折る。

服はゴ布林達の血や泥に塗れて湿り、嫌な重みをシンシアに与えたが、シンシアはただ黙って祈るように目を伏せてゴ布林達の冥福を祈っていた。

祈りを終えたシンシアはリオンが飛び出していた外へ注意を向けながら静かに立ち上がる。

何度目だろうか。リオンが外へでて暫く経つが、外では未だに大きな地響きが断続的に鳴り響いていた。

その度にシンシアは肩を震わせながら外の音を何一つ逃すまいと全身の神経を尖らせ、出会って間もない少年の無事を祈る用に目を瞑る。

一人取り残されたシンシアは胸の前で手をぎゅっと握り、憂いを帯びた瞳が揺れて、口が小さく、少年の名前を形作っていた。

「リオン様……どうか、ご無事で」

シンシアは気づかない。無心で祈りを捧げる自身の周囲に、淡く光の粒が漂い始めていたことに。

まるで祈りが色彩を得たかのように、足元の石から、淡い雪のような物が湧き上がり、煙のように建物の中を満たしてゆく。

トガアアン……

一際大きな音が響き、ビリビリと足元から伝わる振動で髪が揺れる。肩を震わせ、足の裏が痺れる様な感覚にシンシアの整った顔立ちが僅かに歪む。

「……リオン様」

リオンが出て行った後、幾度となく祈るように呟いた少年の名前。震える声を吐き出した唇は白くなるほど噛み締められ、きゅっと寄せられた眉根が繊細で整った顔に皺を刻んでいた。

シンシアの脳裏に、少年の後姿が鮮明に浮かぶ。

少し硬そうな、この国では珍しい黒い髪。鎧一つ纏わない、どこかの学士や士官学校の生徒を想起するような不思議な格好。

紺色を基調とした学士の様な上着の胸元に、所属を表す紋章だろうか。見た事のない異国の装いである事を象徴する赤と黄色の糸で技巧を凝らしたような刺繍。

前が完全に開いた上着からシャツ越しに覗く、決して屈強とは言えないが年の割には引き締まった体躯。

意志の強い瞳が、力強く頷く表情が、危機的状况にあったシンシアを支えてくれた。

そんな少年の姿が目蓋の裏で明滅していた。今も、外では戦っているのだろうか。

外とは対照的に静まり、暖かな日差しが先ほどまでの危機感を忘れさせてしまうほどに穏やかな古ぼけた廃墟の中で、少女は静かに祈り続ける。

少女の祈りに呼応するように、湧き上がる光は廃墟の景色を埋め尽くすように彩り、溢れ出さんばかりの光が静かに明滅を繰り返す。

ヴウン……

不意に、シンシアのすぐ後ろで、何かが揺らぐ様な気配を感じた。まるで世界その物が歪曲し、歪に折れ曲がった道が出来上がったような違和感。

シンシアが違和感に気づいて振り返ると、そこにはまるでその場の空気からにじみ出るように、溢れ出す光を食い散らかすように闇が

現れていた。

「な、何が起こったのでしょうか……？」

シンシアはその闇から遠ざかるように、徐々に後退しながら呟く。注意深く闇を見据えるシンシアの瞳があるモノを捉え、その目が驚愕に見開かれる。

ズブ……ズズズ……ズル……

闇から現れたのは人の指。

まるで生まれてから一度も日の光に当たった事が無いのではないかと  
思うほどに病的に白く、繊細で華奢な印象を受けるその指は、女性  
のものようだった。

現れる部位が徐々に増え、初めの指、続いて手。さらにその先の手  
首から腕が。

そうしてほんの数秒の間に、空間にぽっかりと空いた闇は一人の人  
物を吐き出していた。

黒いローブに身を包んだ、新緑色のプレートメールとこげ茶色のプ  
リーツスカートのような格好の、美しいという枕詞の前に、身も凍る  
ようなと付け加えたほうがしっくり来るような妖艶な女性だった。

背景の闇と対照的な金のツインテールが揺れて、胸にかかる様なも  
みあげ部分だけが夜空をさらに塗り潰したような黒色をしていて、  
両脇に纏められた金の髪と対照的な色合いが、女性の怪しさを助長  
させている。

血を思わせるような緋色の瞳が怪しく光り、まるで夜に浮かぶ月蝕  
を向かえた紅い月の様にも見え、女性の人間離れた容貌に拍車を  
掛けていた。

「探しましたわ。お姫様」

艶のある声が、まるで絡みつくような調子でシンシアに向けられる。  
緩やかに近づいてくる女性が、死体を思わせるような青白く、華奢  
な指先をシンシアへ向けた。

体のラインがくっきり出るような服が、妖艶な女性の印象を更に引  
き立て、ただ手を伸ばすその動作さえ、何かの呪文なのではないか



と錯覚させられる。

突如として現れた女性に対し、シンシアはただ、動く事すら忘れて差し向けられた手が触れるのを呆然と眺めていた。

建物からそれほど遠くない森の中で、再び地響きが鳴り響く。

あちこちに樹がなぎ倒され、窪みができた森林。それは戦いの激しさを物語っていた。

戦いにはまるで向かないであろう学生服を身に纏った少年が地に片膝をつき、荒い呼吸を整えることもせず短剣を構えている。

その体のいたる所に小さな裂傷や擦り傷がはしり、口の端からは血が滲んでいた。

短剣の先に宿る光は眩しい程に輝き、目の前の敵を威嚇するように鋭く薄い。

しかし、所々から光が粒子となってはじけては消え、それが長く持たない事を容易に想像させた。

刃の先で体勢を整えているのは、少年の倍以上はあるかと言うほどに巨大な、浅黒い肌に薄汚い腰巻をつけただけの巨人。

その手に握られた棍棒にはいくつもの傷跡が刻まれ、持ち主であるトロールの体にも、それに似た鋭利な切り傷が幾多も刻まれていた。しかし、その傷のどれもが浅く、致命傷には程遠い事を示唆している。

「諦めが悪い。持ち前の素早さも鈍ってきているぞ」  
荒い息を吐きながらも、まるで小枝を振るつかの如く、その巨大な棍棒を持ち上げて構えを取りながらトロールが言う。

その言葉に、少年は小さく息を吐いて立ち上がりながら

「はっ。お前こそ、そろそろその鈍い体が止まるんじゃないのか？」  
と、口の中に溢れる鉄の味を吐き捨てて口元を拭いながら笑ってみせる。

「掛かってこない所を見ると、大層な口を叩く程には限界が近いようだ」

トロールが、その醜悪な顔をさらに歪ませて低く笑う。

少年はトロールの言葉に思わず奥歯をかみ締める。

「そんな事は言われなくなつて分かつてるつづの……」

トロールに聞こえないように呟かれた言葉は、少年　　リオンの本心。

不意の一撃に期待できない以上、持久戦を持って相手に隙ができるまで翻弄するつもりだった。

しかし、リオンが思っていた以上にトロールは体力があり、その上戦闘に習熟していた。

リオンが持久戦を狙い始めると、トロールも無為に追わずにやり過ぎし、翻弄するはずだったリオンの体力を徐々に削る作戦に出たのだった。

それから先は一方的。隙を見ては仕留めにかかってくるトロールの一撃必殺の棍棒を紙一重で避けながら、形ばかりの反撃を繰り出す。受け止められては距離をとり、息吐く暇も与えぬように飛び掛つては牽制で足止めをされる。

それも徐々に、リオンの体力が限界を迎えつつある事で終わりを告げようとしていた。

「仕舞いと往こうか。マニトの分際で良く頑張つたと褒めてやる」  
トロールがそう宣言し、一際大きく懇望を振りかぶる。

リオンに避ける力は残されていないと踏んだ、トロールの渾身の一撃だった。

目の前に迫り来る壁のような棍棒に、リオンは最後の賭けとして取っしておいた行動に出る事を決断せざるを得なかった。

「　くっそ、があああつ!!!」

叫びながら、リオンは残された力を振り絞る様に強く足を踏み込み、前へ出た。

迫り来る棍棒を、わずかに身を擦る事と、斜めに構えた光の刃で受

け、前傾姿勢のままトロールの懐へ潜り込む。

「これで、終わりだっ！」

光の刃が煌き、軌道が半月を描く。

トロールとリオンがすれ違い、リオンは前傾の勢いに飲まれて地面を転がる。

転がりながらやっとの事で身を起こして再びトロールへ刃を向けた時

ピギッ！

リオンの持つ短剣から、甲高い嫌な音が響いた。

「く、くくくっ……惜しかったな」

緩やかに棍棒を肩に担ぎながら振り返るトロールが、勝ち誇ったように笑う。

見れば、脇から胸にかけて大きな傷が出来ていた。しかし、それでもなお、トロールは悠然と立っていた。

「まだ、まだだ……」

トロールに比べ、リオンは既に満身創痍だった。

意識して握っていないければ、今にも剣を取り落してしまいそうになるほど疲弊しきった体が、手先が、小刻みに震える。

「その体で、その剣で、まだと言うか。そういうのを勇敢ではなく、往生際が悪いと言うのだ」

指摘され、リオンは初めて自身の構える剣の、先ほどまでは無かった違和感の正体に気づいた。

光の刃の元となっている短剣、その刃の根元に大きく亀裂が入り、これ以上一合でも打ち合えば間違いなく折れることが見て取れる。

「理解したか。貴様にこの先はない。あるのは、死だ」

リオンがハツとなって顔を上げれば、既に自身の体をすっぽりと覆うほどの影の下にいた。

目の前で、トロールが巨大な棍棒を振り上げるのが見える。

体中が悲鳴を上げ、動くことができない。

振り下ろされる棍棒の先、脳裏に焼け付くのは様子がおかしかった末明と、クラスメイトや家族。そして、シンシア。

希望を持たせた少女を、せめて助けて見せると決めた。

リオンの決意を、押しつぶすような一撃が迫る。

「《闇の映し世、万理を超えて我が掌の内に広がれ》  
ドポータル」 《シェイ

リオンの耳に、聞きなれない女性の声が響く。

刹那、リオンの足元から漆黒の刃のような物が鞭の様に撓り、迫り来る棍棒の軌道をずらした。

「何ポーっとしてるのかしら。死にたくないなら今しかないわよ？」  
頭上から、先ほどと同じ女性の声が聞こえた。

しかし、そちらを向くよりも先に、女性の言葉が頭に染み渡り、悲鳴を上げる体に渴を入れる。

もう一度強く足を踏みしめて、倒れこむつもりで体を前へ突き出す。リオンとトロールの距離は、既に近すぎるほどに迫っていた。

トロールの足元で、リオンは大きく跳躍する。

「くつらえええっ!!!」

光の刃が周囲の影を切り払い、一際大きく煌いた。

そしてその光は、トロールの胸を貫通して背中を抜ける。

トロールの体を貫いた瞬間、刃は小さな音を立てて根元から折れて、軸を失ったリオンは投げ出されるように転がった。

「ごっ………がっ!？」

折れてなお、トロールの胸に深々と突き刺さり輝きを放つ刃に、トロールは一瞬遅れて自分が刺されたのだと自覚した。

立ち上がりつつあるリオンの方へ向こうと、トロールが最後の力で身を捻ると、胸を貫く刃が光を失い、光に圧迫されていた分の血が一気に噴出す。

大量に吐き出される赤紫色の血液がリオンの肩に掛かり、所々黒く染みが出来ていた紺の制服が、更に黒く塗れた。

赤と金で象られた校章の刺繍は、返り血でもはや何が書いてあるか分からなくなってしまうている。

トロールの体から、急速に力が抜けていくのが見て取れた。

徐々に光が失せてゆく瞳で、リオンを見据えながら、最後の力を振り絞って伸ばされたトロールの手が、リオンの鼻先で力なく落ちる。緩やかに崩れ落ち、動かなくなったトロールの傍らで、リオンはむせ返るような血の臭いなど気にする余裕も無く、崩れるように膝をついた。

その拍子に、戦闘中は一度も落とさなかった短剣、もはや根元から刃が折れ、柄だけになったそれが手から滑り落ちて地面を転がる。

「……………くっ。はあ、はあ……………」

緊張の糸が途切れ、押さえ込んでいた疲労があふれ出す。

今すぐにも倒れてしまいたいと思っていたリオンの頭上、降ってくる拍手の音にリオンの意識は無理やり引き戻される。

見上げれば、そこには太い枝の上に腰掛けて手を打つ、一人の女性の姿があった。

黒い二房の髪がもみあげ部分から胸へ垂れ、その豊かな胸にしな垂れかかっている。

ローブとは対照的な金のツインテールが揺れて、緋色に輝く瞳は怪しげに笑っていた。

ブリーツスカートにも似たこげ茶色の服の裾を軽く押さえつつ、女性はやかに枝から飛び降りて地面に降り立ちながら

「満身創痍ね？勇者様」

と、口元に笑みを浮かべてゆっくりとリオンの元へと歩み寄ってくる。

正体の分からない女性に対し、リオンは本能的に一步退こうと足に力をこめた。

しかし、緊張の糸が解けた体はまったくいうことを利かず、ただ立っているだけで精一杯だった。

「あらあら。逃げなくてもいいのよ？私は貴方のプリンセスのお使いできたのだから」

目の前まで迫った女性はその妖艶な体軀を惜しげもなく晒しながら、細く華奢な指でリオンの顎をなでる。

その声はまるで子供をあやす様な調子で、無意識にリオンの喉が鳴る。

「あいつの……使い？」

辛うじて問い返すリオンにゆっくりと微笑み、女性は手を差し伸べる。

「私の名前はアイリス＝デューレンハイト。あの子の味方よ」

自己紹介をしながら、女性　アイリスはリオンの手をとって立ち上がらせ、そっと抱き寄せるように抱えた。

「……なに、を」

抱きしめられて、息を詰まらせるリオンに

「お姉さんが優しく癒してあげる」

とあって、アイリスはリオンの額に自身の額を重ねた。

すると、アイリスの体から淡い光が溢れ、リオンの体からも、まるで呼応するかのように光が滲み出してくる。

「《万象に秘めたる生命の煌き、癒しの火となり、活力の翼を与えよ》、《エナジーヒール》」

何事かをアイリスが唱えた瞬間、淡い光は暖かな力強さを得てリオンを包み、体の中に染み渡るような暖かさが広がる。

「何だ……これ……」

眩くリオンの体から光が徐々に消え、完全に消えるころにはリオンの体は小さなかすり傷を残すのみで、疲労がある程度回復していることに気づいた。

「治癒の魔術よ。自分で歩ける程度には回復させたつもりだけど、

まだ私の手が必要かしら？」

アイリスが悪戯っぽく笑いながらリオンから体を離し、くるりと身を翻しながら言う。

「……敵じゃ、なさそうだな」

気が抜けたように呟いたリオンの言葉に、アイリスは目を細め

「あら、まだわからないわよ？」

などと言いながら先に歩いていってしまう。

無言でそれを見送ろうとしていたリオンを、樹の向こうからアイリスの声と呼ぶ。

「何してるのかしら？あの子に会いに行くのではなくて？」

その言葉に漸く我に返ったりオンは、あわててアイリスが歩いていった道を追って神殿にも似た廃墟へと戻っていった。

シンシアがアイリスを見送ってから何分経っただろう。

最初は、どうしてこの場所が分かったのか、どうやってここまで来たのか。そんな事ばかりが頭に浮かび、混乱していた。

しかしすぐにオンが大変である事をアイリスに告げ、救援に向かうように指示したのだった。

「リオン様……アイリス様……どうかご無事で……」

きゅつと瞳を閉じ、再び祈るように指を組もうとしていた時だった。「ああああ。その様な言葉は勿体無いですわ。それに、こういう時は笑顔で迎えてあげる事ですわ」

そう言いながら鼻歌混じりに戻ってきたアイリスを見て、シンシアは目を見開いた。

アイリスは出て行った時と同様、埃ひとつ付けずに優雅な立ち振る舞いで戻ってくる。

その姿はやはり森や廃墟には似つかわしくない、妖艶で優美な雰囲気の中に、同性であろうとドキツとさせる様な色香が漂っていた。

その後ろからオンが姿を見せる。

「悪いな、結局あなたの仲間に助けられちゃった」

そう言いながら入ってきたオンは、アイリスとは対照的に酷い格好だった。

目立った外傷はないようだが、服が所々破け、さらに、返り血だと思われる赤紫色の液体が服を染め抜いたように、白いシャツが変色し、紺の上着も重く湿っていた。

赤と金の刺繍で作られた胸元の意匠など、血を吸って見る影もなく赤黒く、下地の紺と同化してしまっている。

それでも、自分の足で歩いて戻ってきたリオンに、シンシアは思わず飛びついてしまった。

「お、おい、あんた……大丈夫だったか？あれから何も」

言いかけたリオンに、胸に縋りつくような体勢だったシンシアが顔を上げて頬を膨らませる。

新緑の瞳が揺れて、愁いを帯びたように目の端に雫が溜まりはじめていた。

「やくそく、しました」

今にも泣き出しそうなか細い声で紡がれる言葉に、リオンはハッとなる。

廃墟を飛び出す前、戻ってきたら、名前でもぶようと、リオンは約束させられていた。

その約束を思い出し、じいっと見上げてくるシンシアから顔をそらしながら頬を赤らめ

「あー……えっと……ただいま。……その、シンシア」

ぽつぽつと歯切れ悪く呟くように名前を呼ぶ。

途端にシンシアの顔が明るくなるが、すぐに自身の状態を思い出したようで、慌てて離れて背を向けてしまう。

耳まで真っ赤になりながらも、ぽつぽつとシンシアが口を開く。

「……お帰り……なさい、ませ。リオン様」

背を向けたままだが、十分に恥ずかしがっているのが伝わるシンシアの物言いに、リオンまで恥ずかしさがぶり返して見る見るうちに頬が薄紅色に変わる。

二人の間に妙な沈黙が流れ、気まずい雰囲気は漂い始めてしまう。

そんな様子を一步引いた位置からにやにやと眺めていたアイリスが口を挟む。

「まあまあ。初々しいのはいい事だけど、お別れはすませたかしら？」



そういつてアイリスはリオンの訊ねる。

「お別れ？」

訊ね返すリオンに

「貴方、元の世界に帰りたくないの？」

アイリスは不思議そうに首をかしげる。

そんな二人の会話に、シンシアは小さく

「……………帰って、しまわれるのですか？」

と、呟くような声でリオンの腕の裾を掴みながら縋る様な潤んだ瞳で見上げた。

今にも泣き出しそうなシンシアの表情に、リオンは言葉に詰まってしまう。

「俺は……………」

どう言った物かと悩むリオンに対し、意外にも助け舟を出したのはアイリスだった。

「彼にも彼の世界で待つ人がいるのですよ。察してあげてくださいませ」

そう言いながらやんわりとシンシアを引き剥がすアイリスに、ずっと不快感や疑念を向けていたアイリスに対し、リオンは初めて素直に感謝の念を抱いた。

数歩下がったシンシアは申し訳なさそうに俯き

「……………そう、ですよ。ごめんなさい、私ったら……………自分の都合ばかり……………」

呟く声は今にも泣き出しそうに震えていた。

そんなシンシアに近づき、頭にぽんと手を置きながらリオンは照れくさそうに口を開く。

「いいんだよ。俺が勝手に助けただけだ」

「リオン様……………」

再びいい雰囲気になりかけた所へ、リオンの背後、魔法陣の方に立つアイリスが

「さて。ゲートを開きましょうか」

と言つのが聞こえ、リオンも振り返りながら頷き、陣の中へ立つ。

「……なんだか、全部が夢みたいだな」

そう呟いたリオンの手に、暖かくて柔らかな感触が伝わる。振り返れば、シンシアがリオンの手を握っていた。

「夢のような、出会いでした。……私、リオン様の事、一生お忘れいたしませんわ」

呟くような声だったが、今度はしっかりとリオンの顔を見て、初めて見せるような、シンシア本来の笑顔なのだろう。可憐という言葉がこれ以上ない程似合っていた。

その笑顔に返すようにリオンも笑い返ししながら

「俺もだ」

と言つて、ぼんとシンシアの頭に撫でる。

柔らかい髪の毛の感触が心地よくて、どこか小動物を思わせるような暖かさがあつた。

「そろそろよろしいですか？」

アイリスの声で、二人はどちらからとも無く離れる。

お互い、これ以上長引かせる事は無意味だとわかつていた。

「ああ、頼む」

シンシアが陣の外へ向かうのを見届けながらリオンが頷く。

「では」

そういつてアイリスが陣に手をかざし、呪文を唱えようとした瞬間だった。

ジジ、ジ……

足元の魔法陣 ではない。魔法陣の上空で、虚空が歪む。

そちらを見るアイリスの表情で、それが自身が求めている物ではない事をリオンも悟った。

歪みが大きくなり、中から何者かが滲み出してくるのが分かる。

シンシアも未だ陣から出きらずに、驚きと困惑が入り混じった表情で、ただ歪みを見ていた。

リオンは咄嗟にシンシアを抱き寄せ、歪みから遠ざけるように自身

の影に庇う。

空間の歪みが一瞬大きく揺らぎ、人影が実像を結ぶ。

「こ、ここは……」

姿を現したのは小奇麗な鎧姿をしたセミロングの女性だった。

年はおそらくアイリスと変わらないくらいだろうが、アイリスが色つばい分、こちらの女性は幾分か幼く見える。

屋根の隙間から入り込む日の光を受けて、時折金色に見える茶髪が燦然と揺れ、左右で色の違う、深緑と鳶色の瞳が驚きに見開かれた。見据える先は、リオンと、シンシア。

「今度はなんだ!?!」

突然現れた女性を警戒しつつ、リオンが声を上げる。

すると、先ほどまではシンシアにのみ焦点が合っていたようで、初めてその手前にいるリオンに気がついたようだった。

「殿下!! 貴様! さては殿下を拐した犯人だなっ!!」

その様相を見るや否や、凄まじい憤怒の形相を浮かべ、腰に佩いた剣を抜き放ち声を張り上げる。

「っ!?! おい、何だよ!! お前もさっきの奴らの仲間か!!!!」

先ほどの短剣は既に折れてしまっていた為、トロールを倒したところに置いて来てしまっていた。

まったくの丸腰だった事を今更ながらに自覚し、それでもシンシアを庇おうと前へ立ちながら茶髪の女性に問う。

すると、女性は問答無用とでも言うように抜き放った剣を大上段に構え、飛び掛りながらリオンを斬り付けようと思いつき振りぬいた。

「何をわけの分からない事を言っている!」

リオンが飛びのいた直後、リオンが立っていた場所に剣が深々と突き刺さり、床が砕けて宙を舞う。

その細身から繰り出されたとは思えないほどに力強い一撃に、リオンは直感的に只者ではない事を悟り、そして

「おやめください!!!!!!」

無手でもせめてと構えを取ろうとしたリオンと女性の間に、あろう

ことかシンシアが飛び込んで両手を広げて女性を制止させたのだ  
た。

「ですが殿下」

突然のシンシアの行動に女性の方が動揺し、何事か口走ったようだ  
ったが、シンシアはこれを頑として受け付けず

「エレス、いいえ、エレストアニアニテルカ近衛師団長、この方  
は私の命の恩人です。これ以上の無礼は私が許しません」

と、今までとは打って変わった凜とした口調と共に宣言する。

先ほどまでの強硬振りが嘘のように、シンシアの言葉を聴いた謎の  
女性 エレストアは明らかに狼狽して

「な……殿下、今、何と……？」

と剣を構える事など頭に無いという風に、誰がどう見ても隙だ  
らけの状態でシンシアに訊ね返す。

そんなエレストアにシンシアは怪訝な様子を隠そうともせず、眉間  
にしわを寄せて、おそらくは滅多に無いだろう怒り顔を向けながら  
答える。

「……？ですから。このお方は私の命の恩人であると」

「では、殿下、殿下はこの様な僻地へ一人でいらっしやっただと？」

「ええ」

「……嚴重に隠された、殿下の近衛隊長でもある私ですら知らされ  
ていなかった隠し通路の奥の魔法陣を使って？」

「ええ」

会話の応酬が定型と化したころ、見計らったようにアイリスが二人  
の間に割って入りながら

「はいはい。エレス。貴女は有能なのに早とちりするところが  
致命的よ」

と言いつつエレストアの頭を軽く小突く。

軽くと言っても、それこそ手先がぶれるほどに素早い手だった為、  
乾いたいい音が廃墟に木霊した。

その光景に、眉間に皺が寄りっぱなしだったシンシアも驚きのあま

り皺が解けて目を見開き、リオンもびくつと体を硬直させる。

「……アイリス殿。いつから？」

叩かれた頭を必死にさすりながらエレストアは今更気づいたようにアイリスに言う

「最初からいたけれど？ 貴女がカツカしすぎて愛しの殿下にしか目がいつてなかったからではないの？」

アイリスは態と聞こえよがしにシンシアの方を見やりながらにやにやとエレストアに言うのだった。

「……くっ」

そんなアイリスを若干睨みながら、悔しさやら恥ずかしさやらの入り混じったなんともいえない表情で、つまるところ、苦虫を噛み潰したような表情でエレストアが呻く。

「ええつと……どうなってるんだ？」

さっぱり流れについていけないリオンが漸く我に帰った事で、誰にも無く訊ねる。

すると、先ほどまでの険のある表情はどこへやら、申し訳なさを体全体で表現した様な様相でエレストアがリオンに向かい

「殿下の恩人だったな」

と、若干トーンの落ちた声で確認を取る。

「ええつと……シンシアの事か？」

咄嗟に殿下などと言われても、思い当たる節がなかったが、流れとしてはシンシアの事なのだろうかと言ねると、エレストアは大きく首を縦に振ると

「恩に着る！……」

まるでそのまま体の上に物を置いても落ちないのではないかと思うほどに見事な礼でもってリオンに頭を下げた。

「うおっ！？ な、何だよいきなり！！」

その勢いに若干引き気味なりオンが戸惑いながら言うと

「そしてすまなかった！！ 早とちりとは言え、主君の恩人に手を上げるなど、決して許される行為ではないことは重々承知の上！ どの

の様なお詫びをしたら良いやら皆目見当もつかない次第っ!!」

とって、いじけるやら申し訳ないやらのごちゃ混ぜになった、思い切り体育会系なノリの堅苦しい謝罪をぶちまけ、エレストアはもはや体が九十度に紛っているのではないかと思うほどに低姿勢になっていた。

「い、いや。別に気にしてねえからいいけど……」

リオンがしどろもどろになりながらも謝罪を受け入れると、すっと立ち上がりそのままリオンの手を力強く握り締め

「なんと心の広いお方だ。しかし、それでは私の気が治まらない。

私に出来る事があるのならばなんでもしよう。さあ、言ってみてくれ！」

などと、鼻息荒くリオンの顔面すれすれ、要するにキス一步手前まで近づいてまくし立てる。

「ちよ、ちよっと待て、俺はもう帰るところだったんだ!! だからお礼とか別にしなくていい!それに、元からお礼目当てで助けたわけじゃねえ!!」

慌てて手を振り払い、距離をとりながら叫ぶリオンの言葉に

「何と豪気な……さぞや高名な騎士なのだろう!?是非とも名を聞かせてほしい!」

などと、身を震わせるほどに感動したと言わんばかりに左右で違う色の瞳をきらきらと輝かせながら訊ねてくる。

「だーかーらー!!俺は騎士でもなんでもねえっての!!ただの高校生だ高校生!!」

「コーコーサーとは一体なんだ?……さては結社の者か!??」

聞き覚えのない単語に身を硬くし、次の瞬間には再び剣呑な雰囲気とともに剣の柄に手を伸ばすエレストアに、リオンは慌てて訂正を入れる。

「なんでそーなる!?学生だ!が・く・せ・い!!!」

「何と!!学士であったか。なんと勇敢な学士なのだろう。世にこの様な勇猛な学士ばかりならば帝国などになめられる事もなかった

だろつに……」

なおもぶつぶつと何かを堅苦しい調子で語るエレストアを尻目に「……なんだろう。さっきのでっかい奴を相手にしてる時より疲れた気がする。……俺、帰りたいんだけど」

ものの数分でげっそりとやつれたリオンが呟いた。

その言葉に反応したように、今まで黙り込んでいたアイリスが口を開く。

「その事なのだけど」

「ん？」

「無理ね」

「はあ!？」

突然の宣言に面食らい、思わず頓狂な声を上げてしまう。

そこでようやくエレストアも我に返ったのか、口をつぐんでアイリスたちの方へ耳を傾けた。

「無理つて、何で無理なんだ!？さっきまで出来るっていったじゃないか!?!」

詰め寄らんばかりの勢いで問いかけるリオンと、それをどうしたらいいのか分からずに見守るシンシア。

蚊帳の外のエレストアも、黙って流れを見ている。

「さっきまではね。私は貴方の契約者じゃないから貴方の世界へのゲートなんて開けないのよ。それこそ貴方がここへ来た道をもう一度開くくらいでないかね」

肩をすくめながら片目を瞑って言うアイリスに、リオンはなおも食って掛かる。

「だったらそれをやればいいだろ!？」

肩をつかみ、強く揺らしながら言うリオンに

「だーかーらー。いつてるじゃない。無理だつて。ほら。貴方が通ってきたゲートは今さっきエレストアがぶっ壊しちゃったし」

アイリスは揺られるままに弁解するように陣の一部を指し示しながら答える。

「……へ？」

掠れ、苔むした文様に、新たに刻まれた明確な傷跡が、文様の線を断絶させていた。

「さすがに私でもこんな昔の、しかも本来の方式とはずれた例外的な契約術式の召還陣なんて修復できないわよ」

「ええっと……それってつまりどういう……」

戸惑うリオンに、アイリスは断定的な口調で

「貴方は当分帰れないってこと」

といいながら、この状況を招いたエレストアの方に視線を向けながら肩をすくめてみせる。

つられてリオンとシンシアもエレストアに視線を向けると、エレストアは申し訳なさで完全に縮こまってしまっていた。

「……嘘だろ？」

もう一度、確認するように問いかけるリオンに、アイリスは冗談めかして

「やあね。私が嘘を吐くように見えるかしら」

といいつつ、体のラインを強調するように身をくねらせて妖艶に微笑む。

「……正直」

リオンが頬を赤らめ、豊満なボディラインから照れるように目をそらしつつ小さく答えると、アイリスはくすくす笑いながら

「あら。素直な子は嫌いじゃないわよ」

といってリオンの顔が自分に向くように顎に手をやる。

細い指先に顎を撫でられ、導かれるように視線を戻されながらも

「冗談じゃねえっての……!!」

つい乗せられて冗談に乗ってしまった後で言うのも遅いのだが、リオンは再び声を張り上げた。

リオンの大声をアイリスはむしろ面白がるように口元に手を当てて目を細める。

そんな様子のリオンとアイリスに、シンシアはおずおずと割って入り



「……あの、そんなに、この世界が嫌いですか？」

と、リオンの後ろから服のすそを軽くつまむ様にしながら上目遣いで問いかける。

「え、いやそれは……そういう意味じゃ」

思わぬ方向からの横槍にリオンが狼狽しながら答えると、エレストアがリオンとシンシアの間を裂くように

「貴様！殿下を泣かせるとはいい度胸だ！そこになおれ！」

今にも剣を抜きかねない剣幕でリオンに食って掛かる。

瞳の端に雫が滲み、泣き出しそうな表情で見上げてくるシンシア。

それを見て、鬼すら逃げ出すのではないかと思うような形相で、黙っていれば美人に入るだろう顔をこれでもかと言う程に憤怒に歪ませるエレストア。

新しい玩具でも見つけたように目を細めて口元を綻ばせ、三者のやり取りを傍観しているアイリス。

三者三様の女性に囲まれた、ある意味羨ましいともとれる状況にもかかわらず、リオンは頭を抱えてしまう。

「ああー！！もう！！お前はややくしくなるから少し黙ってる！！！！」

びしつと突きつけるようにエレストアを指差しながら叫ぶ。

「むっ……」

思い当たる節が合ったようで、エレストアも不服そうな顔を隠そうともしないが、それでも剣にかけていた手を離して口を嚙む。

今にも泣きそうな表情で服のすそを掴むシンシアを宥め、その光景をにやにやと眺めているアイリスを睨み付ける。

漸く落ち着き始めたシンシアに服の裾を放して貰い、精神的な疲労度も重なって、半ば投げやりな気持ちになり始めていたりオンがアイリスに尋ねる。

「……で、俺はこれからどうすりゃいいんだよ」

笑い続けていたアイリスの表情がすつと覚め、リオンの言葉に答えながら緩やかに魔法陣に足を向けながら

「貴方はどうしたいの？ここで暮らす？ただ暮らすだけならそのお嬢さん。貴方が助けたお姫様が不自由なく融通してくれるはずよ？」

アイリスはそう言いながらシンシアを示す。

突然会話の引き合いに出された当のシンシアはびくつと肩を揺らし、リオンとアイリスを交互に見ながら首をかしげた。

「俺は……出来る事なら元の世界に帰りたい」

シンシアを一瞥し、アイリスに向き直りながらリオンが言う。

「故郷ではなく、元の世界。ね……この世界が貴方のいた世界とは違う世界だって事は理解してるって事でいいのかしら？」

アイリスは口元に小さな笑みを浮かべ、リオンに対してウィンクする。

そんなアイリスにリオンはため息交じりに答えながら

「……まあ、薄々とな。つて言うか。あんたたちの見た目とか、さつきから立て続けに起きてる突拍子もない現象とか見せ付けられたら嫌でもな……」

自身の服にへばり付いて異臭を放ち始めている赤紫色の染みに顔を顰め、上着を脱いでもどうにもならない事を確認して肩をすくめる。

「んで、シンシアは何で狙われてたんだ？運よく俺が駆けつけられなきゃ死んでたぞ。たぶん」

シンシアを横目で見ながら言うリオンに

「そうね。言葉では言い表せないほど感謝しているわ。この子が無事で本当に良かった」

アイリスは仰々しく頭を垂れる。

そんなアイリスの様子にリオンが困惑して頭を掻いていると、顔を上げたアイリスは瞳に不穏な光が宿らせながら

「そう遠くない内に更に過酷な状況になるかもしれない事を除けばね」

怪しい笑みさえ浮かべて腕を組み、リオンをじっと見据えた。

その無形の威圧感と、言葉からにじみ出る危機感のような物にリオ

ンの中の熱がすつと冷め、目の前の妖艶な美女から発せられる得体の知れない感覚に

「……何？」

リオンは眉を顰めて低く、威圧し返すような声音で尋ねる。

そんなリオンの脅しなどどこ吹く風で、肩をすくめて腕を組みながら

「貴方には関係のない話よ。帰るのでしよう？元の世界へ」

アイリスはため息交じりにリオンから視線を外す。

「シンシアは助けただろ？」

「この場では。ね」

リオンの言葉に、アイリスはただ含みを持たせるような言い方で短く答える。

「……説明しろよ」

一歩詰め寄るように近寄りながら、先ほどよりも強い語調で問い掛けるリオンに

「説明したら、どうなるのかしら」

威圧を受け流すように片目を伏せながら、アイリスは試すように問い返す。

しばし考え込むように黙り込んだリオンと、悠々と自分の黒い部分の髪を弄りながらリオンの様子を観察するアイリス。

シンシアは二人の間に割ってはいる事すら憚られる重い雰囲気に呑まれ、その場に立ち尽くし、二人を見守る様に指を組んだ。

重苦しい沈黙が、暖かな日差しの差し込む廃墟の埃っぽい空気を更に落とし込むようだった。

時間の流れが数倍にも感じるような沈黙の後、決意したようにリオンが顔を上げ

「……俺は、シンシアを守ると決めた。一度決めたことを途中で放り出したくねえんだよ」

と言って拳を握りこんだ。その手から淡い光がこぼれ出るのをアイリスは観察するように目を細める。

「それだけの理由？」

先ほどまでの険のある言い方とは違う、人をからかう様な調子で問い掛けるアイリス。

「悪いかよ。……それに、どうせすぐに帰れないんだ。だったら少しでも役に立つ。それだけだ」

リオンとアイリスの視線がぶつかり合い、再び沈黙が訪れる。

しかし先ほどよりも早く、アイリスが折れたように息を吐きながら口を開く。

「まあ、及第点って所かしらね」

やれやれと言った風に首を振るアイリスに、先ほどリオンに言われた事を気にしていたのか、黙り込んでいたエレストアが口を挟む。

「あ、アイリス殿？……さっきからいったい何の話をしているのですか。それに、殿下の御身が危険とは、いったいどういう事か。私にも説明していただきたい」

エレストアの言葉に頷きながら、背を向けつつ手を虚空に向け

「その話もしたいのだけど。その為にも一旦拠点に戻りましょうか」と言つと、アイリスが手をかざした先の景色が僅かに歪む。

「ザ、ザザ……ヴウン……」

歪んだ先が、闇に飲まれるように、景色が漆黒の渦へと変わる。

風景の残滓が意味のない色彩へと代わり、褪せるといふより溶けるように、常闇の渦が空間を侵食していた。

凪いでいた風を飲み込むような暗い次元の裂け目に驚きながらも

「拠点……？」

エレストアが落ちて来た時に耐性がついたお陰か、リオンは辛うじて尋ねることが出来た。

そんなリオンの問い掛けに答えることなく、暗闇に溶けるような外套を翻しながら、まるで愚痴る様にアイリスがぶつぶつと呟く。

「そもそも、私がここにきたのも殿下を連れ戻すためだし。……困るのよねー。まだ慌しい時期なのに勝手に居なくなられると」

別段怒っている訳ではないと分かる言い方だったが、嫌味なども言われる機会がそうないシンシアは至極申し訳なさそうに

「う、ごめんなさい……」

何度も頭を下げて謝る言葉が見る見るうちに小さくなってゆく。そんなシンシアに、思わずと言った風にエレストアが弁護するように口を挟む。

「アイリス殿！殿下にも相応の事情がおりのはず、何もその様な言い方をせずとも」

「いえ、ね？よく考えて御覧なさいよ。このご時勢でこの子が中枢を離れているという事情が外に漏れでもしたら、それこそ今まで頑張って進めてきたこの子を中心とした政策が水の泡じゃない」

「そ、それはそうですが……」

完全に言い負かされたエレストアが悔しげに言葉を詰まらせる。

「いいんです。アイリス様の言うことは尤もですわ……私の浅慮でした。ごめんなさい」

俯いていたシンシアが顔を上げ、一歩進み出ながら言った。

そんなシンシアにアイリスは小さく笑い、肩をすくめながら首を振る。

「いいえー、それはもういいわあ。……それなりの収穫もあったことですよ？」

リオンの方に顔を向けつつ、アイリスが目を細めながら言った。

意味有り気なアイリスの言葉にリオンは半歩身を引きながら

「今度は何だよ」

と言って身構える。

そんなリオンの前へ優美とも言える様な仕草で歩み寄り、リオンの手を取りながら、アイリスは悪戯っぽく笑い

「お待ちしておりましたわ。勇者様？」

と、リオンの手の甲にキスをした。

シンシアとエレストアが驚愕に固まり、リオンもまた、困惑と驚きとが入り混じった頓狂な声を上げる。

「……はあっ!？」

静けさを取り戻した森にリオンの声が響き、戻ってきていた小鳥た

ちが再び木の枝から飛び立っていった。

く助けを呼ぶ声く（後書き）

……花、賑わい……？

これを羨ましいと取るか大惨事と取るか。

それは各々の判断なのでしょうが、僕から見れば大惨事の一言に尽きます。

それでは、次は小柳春の視点に戻った第二章。

そちらも引き続きお読み下されば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5079z/>

---

少年は幻想の夢を見るか？

2011年12月24日10時47分発行